

棒に達えねえ

「泥棒！」

與八が大きな聲で叫ぶと、その聲は外なる怪しの男よりも、家の中の大一座を驚かして、障子を蹴開いて廊下へ走り出でます。

二十八

その翌日の朝、與八は竹箒で庭を掃いてゐますと、他の女中は昨夜の疲れで寝てゐるのに、みどりの部屋のみは障子が開いて、もう起きてゐるやうです、それとも夜通し寝なかつたものかそれとは知らずに掃いて來た與八は「これは、みどり様お早うございます」

箒の手を休めて、頬冠りをちよいと外してお辭儀をする

「與八さん、大層早く御精が出ますね」

「エ、どう致しまして、わし等別々に早いこともありましねえがお前様こそエラク早起きで」

「昨晚は御苦勞でしたねえ、まあ少し此處でお休み」
みどりは障子を開けて親切に與八を勞はり

「お茶を一つお上がり」

茶と菓子とを椽側の處へ持つて出ます

「こりやどうも恐入ります」

與八は大悦びで

「お前様はいつも、わし等がにそんなに親切をして下さるから有難えと思ひます、ほんとに濟みましねえ」

悦びながら相當に遠慮をしてゐるのを

「さあ其處へお掛け、與八さんわたしはお前にお禮を申さねばなりませんぬ」

「何のお前様にお禮を云はれるやうな事をすべえ、行き届かねえ田舎者ですから面倒を見てやつてお呉んなさいまし」

與八は頬冠りを取つて手拭を鷲づかみにして、頻りにお辭儀をします。

「お茶がはいりました、遠慮をしないで」

「はい、ごうも濟みましねえでございます」

與八は、やつとの事で椽側へ腰をかけ、無器用な手つきをして、恐る／＼茶碗を取り上げて押し戴きます。

「甘いものは好きかえ、こゝに羊羹があります」

「ごうも濟みましねえ、こんな結構なお菓子を戴いてごうも濟みましねえ」

與八は片手に茶碗、片手に羊羹を戴いて、幾度もお禮を繰返す。

「與八さん、お前は随分立派な身體ねえ」

「えゝ、大くばかりあつて此の世の穀つぶし見たやうなものでございます」

「その身餘では力もありませうね」

「力なら大概の人に負けましねえ」

無邪氣なる自負の色を浮かせて

「力づくなら誰にも負けねえけれど、昨晚の泥棒見たやうな素敏い奴には敵はねえ、幽霊見たやうだ、其處に居たかと思つとスーッと消えてしまふだ、あんな泥棒はつかめえ處が無えでがすから力づく

くにやいかねえ、それでどうく取り逃がしてしまつた」
與八少々残念らしく見えます。

みどりの爲には昨夜の泥棒は虎口を救うて呉れた恩人であります。

この與八があの時、泥棒！と叫んで呉れたればこそ、お蔭で恥かしい口を逃れたものです。みどりは其れとは云はずに話を別の方へ持つて行つて

つて行つて

「あの與八さん、お前のお國はどちら」

與八は羊羹を頬ばつた口をゆがめて

「俺が生れ土地は何處だか知らねえ」

「ホホ生れ土地を知らないの」

「俺、棄兒だからな、物心を知らねえうちに打棄られたから、何處で生れたか知らねえ」

「まあ、お前さんは棄兒」

「さうだあ、青梅街道といふ處へ打棄られて、人に拾はれて育つたから、生れ土地は知りましねえ」

「可哀さうに、さうして育てられたのは」

「それはね、この玉川上水を二十里も上へのぼると澤井といふ處がありますあ、その澤井の机彈正といふ先生に拾はれて、育てゝもらつたでがす」

「それでは多摩川の上の方、わたしも子供の時分、あの邊を通つたことがありました」

「さうかね、あの街道は甲州の大菩薩峠といふのへ抜ける街道だ」

「大菩薩峠」

「大菩薩峠といふのは上り下りが六里からあるで難澁な道だ」

「あゝ、さうでござんす、あの大菩薩には猿がたんと居て、峠の頂上には観音様のお堂がありましたなあ」

「お前様よく知つてござるが、あの峠を越した事がおありなさるかえ」

「エ、四五年前に」

「四五年前、それではやつぱり俺があの水車小屋に居た時分だ」

「奥八さん、いつか一度あの大菩薩峠へ、わたしをつれて行つて下さいな」

「あんな山奥へかい」

「わたしは、モーべんあの峠へ行つて見たい」

「俺もお前様、本當の話は、此の頃こちらで奉公をしてゐるけれども、やつぱり昔の山ん中がいとと思ふから、お邸を暇を貰ひ申して

歸るべえかと思つてるところでがす」

「まあお前奉公が飽きたの」

「あゝ厭になつちまつた、俺がには水車番が性に合つてるだあ」

「そんな事を云はないで、いつまでも一緒に御奉公をしてゐてお呉れ、そして歸る時には、わたしを大菩薩まで連れて行つて下さい」

みどりの眼には涙が宿ります。奥八はしばらく考へてゐましたが

「お前様にさう云はれると、俺も何だかお前様を残して此のお邸を出かけるのが氣がゝりになるだ」

奥八は、みどりの爲に影になり日向になつて、力を添え、みどりは奥八々と唯一の頼みにして二人は兄妹のやうな親しみを加へて行きます。

幸にして其の後、みごりの身の上には格別の危ない事もなく、他の侍女共が主人の寵を専らにして居りますので、引こみ勝で隠れた仕事をのみをして日を送つて居りました。

二十九

「新徴組」といふ壯士の團體は、徳川の爲に諸藩の注意人物を抑へる機關でありました。先づ江戸市中に入り込む志士或は浮浪の徒を捕縛し、手剛いのは暗殺する。これが「新徴組」の役目です。神田柳原の金子といふ同志の家の一間で、凄い目つきをした十餘人の新徴組が、朝から寄り集まつては私語合ひ、一人出て行き、二人出て行き、また一人戻り二人戻り、何か打ち合はせをして居る。

十一月の末で、今日は餘程寒い、天も朝からどんよりとして居たが夕方からは果して粉のやうな雪が降りはじめました。

寛永寺の暮六つが鳴り渡ると、最後に出かけた一人が立ち歸つて

「隊長、首尾は上々じゃ」

「それは大儀」

隊長と呼ばれたのは水戸の人、芹澤鴨

「杉山左京が邸を乗り出した駕籠が二挺、その後ろのが正しく清川八郎」

「確ど！」

「相違ない、拙者は武兵衛に跡を頼んで置いた、急ぎ用意あつて然るべし」

「心得たり」

十餘人が躍り立つて用意の黒装束。

一方には大盃に浪々と酒を注いで

「待て、後ろなるは目ざす清川八郎、前なるは何者じや」

一隅から吼え出したのは新徴組の副將で、鬼と云はれた近藤勇。

「おゝ、それでござるか」

斥候から歸つて來た武士は近藤の方へ向いて

「それは慥かに高橋伊勢守」

「なに高橋！」 一座が面を見合せる。

高橋伊勢守は後の泥舟翁、槍を取つては當時海内の随一人。

其の頃、丸の内の杉山左京といふ旗本の邸に、月二三回位づゝ毛色の變つた人々が集つて、四方山の話をする會があつた、集まる人は

高橋伊勢守、山岡鐵太郎、石坂周造、安積五郎、清川八郎、金子與

三郎それに島田虎之助の面々で、幕臣もあれば勤王家もある、太

た人數では無かつたけれど、この會合は新徴組からヒドク目ざゝれてゐました。

殊に清川八郎こそ奇怪なれ。彼は一旦新徴組の幹部となつた身であ

りながら、蔭には勤王方に心を運ぶ二股者、先づ清川を斬れど其の

計畫が今熟しつゝあるので、晝の中より杉山邸へ放つた斥候が、今上々首尾の報告を齎したわけです。

「高橋何者ぞ、彼も諸共に叩き斬れ」

隊長芹澤の氣色は厲しい。

「伊勢守は幕府の重臣じや」

口を挿んだのは近藤勇とは同郷、武州多摩郡石田村の人士方歳三。

「幕臣でありながら浮浪者と往來する高橋伊勢奴、幸の折柄、清川諸共に叩き斬るが宜い、それとも從五位の槍が怖いかな」

芹澤は斯う云つて近藤土方等の面を意地悪く見廻すと、勃然としたのが近藤勇です、愛する處の扱ければ必ず人を斬るといふ虎徹の一刀を引き寄せて

「近藤勇が虎徹こゝにあり、高橋伊勢槍を取つての鬼神なりとも何の怖るゝ處」

昂然たる意氣を示して芹澤を睨め返す。

「待て」

土方歳三は徒らに氣の立つ芹澤と近藤とを和めて

「今夜目ざすは清川一人、餘人を突つて無駄の骨折するも面白からず、二人の駕籠が離るゝまで待つて易々と清川の首を擧ぐるが勞

少くして功が多い、如何でござるな」

「うむ——」

芳澤も近藤も一座も僅かに頷いて土方を見る

「これより見え隠れに二人が駕籠の跡を追ひ、高橋が乗物の離れたる折を見て清川を血祭りにする、若し其の折を得ずば二人諸共」

「よし、其れも一策じや、然らば此の仕事の采配を土方氏貴殿に願はうか」

芹澤に云はれて土方歳三は言下に引き受け

「承知致した、貴殿並に近藤氏はこれに待ら給へ、仕留めて參る」

「總勢十三人、よいか」

「よし」

この時近藤勇は、ふと座の一隅を振り返つて

「吉田、吉田氏」

少し酔うて、さき程から眠つて居たらしい一人を呼びかけて、づしづと押しゆすると、むつくり起きて、まばゆき眼を見開いたのは机龍之助でした。

机龍之助は近藤土方等とは同國の好しみで、しばらく新徴組に姿を隠して居ります、呼び醒されて

「眠り過ぎました」

刀を取つて一座の方へ進み寄ると、土方歳三が

「吉田氏、いづれも斯くの通り用意整うた」

「ほう、拙者も仕度を致さう」

龍之助は、身ごしらへ、足ごしらへ、黒い頭巾を取つて被らうとしながら

「相手は清川一人か」

「さい前も申す通り、別に苦手が一人」

「苦手とは」

「槍の高橋伊勢守が同行」

「さらば二人諸共殺るか」

「いや目ざすは清川一人なれども、罷り違へば高橋諸共」

「うむ」

龍之助は土方の面と岡田の面とを等分に見比べながら

「若し高橋を相手に取る時の其の手筈は」

「拙者は各々と直に清川に向ひ申さん、高橋邪魔立致さば吉田氏貴

殿と岡田氏にて」

「心得た」

土方は手勢をまとめて清川に向ひ、萬一高橋其他の邪魔立もあらば机龍之助と岡田彌市どが是れに當るといふ手筈を茲に定めました。

新徴組は野武士の集團である。野にあつて腕のムツ痒さに堪へぬ者共を幕府が召し集めて、最も好むところの腕立てに任せる役目ですから、毒を以て毒を制すると謂つべきものです。

近藤勇は野猪のやうな男である。感情に走り易く、意氣に殉し易い代りに、事がわかれば敵も味方もなくカラリと霽れる、その劔の荒いこと無類、術も固より優れて居たが、氣を以て勝つ。

土方歳三は之れに比べると陰忍の男である。落着いて居たが荒れる時は近藤以上に荒れる。怨みはよく覚えて居て根に持つて何時までも忘れない。近藤は御し易し土方は御し難しと有司も怖れて居た。

隊長の芹澤は性質が殊に僻けて居た。後に京都で近藤勇に殺される芹澤死して後の新徴組は、近藤勇を隊長として改めて「新撰隊」となる。それは後の話。

雪はチラ／＼と降りつゞき、夜は四ツ過ぎで、風が無いから割合に寒くはないやうなものゝ、時節柄ですから人通りなどは殆んどありません。

練堀小路あたりで按摩の笛、駿河臺の方でべう／＼と犬が吠える、物の音はその位のもので、其處へ二挺の駕籠が前後して神田の昌平橋にさしかゝる。

前の駕籠側には一人の供が槍を擔いでついてゐる、後ろの提灯の紋は抱茗荷。

二つの駕籠が雪の昌平橋を無事に渡りきると、棒鼻の向が少し變つて、前の講武所の方へ向き、同時に駕籠の中から何か聲高に言ふのが聞えると、それに應じて後ろなる駕籠の中からも、前のよりは少し低い調子で一言二言云ひ出すのが聞えます。

そこで二つの駕籠は別れて、前のは槍を持たせたまゝ、講武所から聖堂の方を指して行く、後なる抱茗荷のは、そのまゝ一直線に外神田から上野の方面をさして進んで行きます。

その時、昌平橋の此方に海坊主の寄合のやうに固まつて、其の乗物に些とも眼を放さなかつた連中が、今や前後の乗物が別れたと見るとスーツと爪先立つて橋を渡り、太刀の柄を握り締めた十餘人は云はずとも彼の土方歳三を大將とする新徴組の一團です。彼の槍を持たせて講武所から聖堂の方へ別れた乗物は、疑ひもなく

高橋伊勢守で、高橋の邸は牛込神樂坂で、邸内には名代の大楠があつて、俗に楠のお屋敷といふそれへ歸るものに相違ないのです。案の如く高橋をイナす事が出来て、目ざす清川八郎たゞ一人、新徴の壯士は刀の鯉口を切つて駕籠を目がけて一時に飛びかゝらうとするのを、土方は

「叱！」

と制する。大將の許が無いので、腕は鳴り刀は鞘を走らうとするのを抑へて、土方を先に十餘人が乗物のあとをついて、五軒町末廣町と過ぎて廣小路へかゝらうとするが、土方はまだ斬れども蒐れども云ひません。

こんな事を知らう筈のない清川の乗物は、ずつと上野の山下へ入つて行きます。

「町家を避けて山へ追込み、そこで充分に引導を渡すつもりだな」
斯う思つて各々は同じく山下へ入り込んで行きましたが、屈竟と思
ふ木蔭山蔭をも無事に通り抜けさして遂に鶯谷、新坂の下まで乗物
を送つて来てしまひました。
何の事だ此處を過ぐれば山は盡さる。

三十

新坂から鶯谷へかゝる處、後は物すごい上野の森、離れては根岸か
ら浅草へわたり、寺院や武家屋敷の屋根が所まばらに見える位のも
のです。

清川八郎を乗せた駕籠がいよゝ新坂下の原までかゝつた時に、雪
は降ることが大ぶ薄くなつて、折柄月のあるべき夜でしたから空は
著しく明るく見えました。

「待て！」

今まで息を殺して居た土方歳三が大喝一聲、自ら颯と太刀を引き抜
くと、蝗の如く十餘人抜きつれて乗物を圍む。

駕籠身はそれと見て立すくみ

「誰だ、誰だイツ、ふ、ふざけた真似をするない」

振舞酒の餘勢で卷舌をつかつて見ましたが、からきり物になりませ
ん。提灯を切り落されると地面に突伏して

「御免、お助け、命」

「行け！」

恣に駕籠昇風情の命を取ること好まなかつた、こけつ轉びつ彼

等が上野の山蔭に逃げて行くに任せて、さて十五人の刃は一つの乗物に向

駕籠の中はヒツソリして殆んど血の通ふ人の氣はあるまじき容子です。眠つて居たならば覺めねばならぬ、覺めて居たならば起きねばならぬ。

「出ろ！」

呼ばゝつて見ましたけれども、相も變らずヒツソリとしたものです。土方歳三は一人の黒と領き合うと、スーツと左の方から進み寄つて太刀を取り直す。

同時に、今領き合つた黒の一人は、右の駕籠側に廻つて太刀を振りかぶる。

残る十餘人は、やゝ退いて、透間もなく遠巻にして居ると、土方が取り直した太刀は矢の如く、巖も透れど貫いた――がやつぱり手答へも何んにもない。

と見れば太刀を振りかぶつて居た黒の一人は、何に驚いてか

「苦！」と叫んで柳の葉の落つるやうに太刀を振り捨て、身は屏風を倒すやうに雪の中にのめつてしまひました。

土方をはじめ一團が、これはと驚く時は遅く、北の方にめぐらされた寺の垣根を後にとつて、下げ緒は早くも襷に結ばれ、太刀の構へは平青眼。

「無禮をするな、拙者は御徒町の島田虎之助じゃ、果合ならば時を告げて來れ、恨みがあらば其の由を云へ」

「失策た！」

思はず叫び出でたのは土方歳三です。

藪を突いて蛇ではなく駕籠を突いて虎を出してしまつた。

これより先き清川八郎は、丸の内の杉山邸を出づる時、取違へて島田の駕籠に乗つて出てしまつたので、島田は清川の駕籠で歸ることになつたのです。

至極の達人には、おのづから神に通ずるところのものがある。この途中、島田虎之助はフト怪しい氣配に打たれたので、元より新徴組が斯く精銳を盡して來やうとは思はなかつたが、心得ある乗方で乗物の背後にヒタと脊をつけて前を貫く刀に備へ、待てど土方の聲がかゝつた時分には、既に刀の下げ緒は襷に絞ごられ、志津三郎の愛刀の目釘は濕されて居た。空を突かした刀の下から同時にサツと居合の一太刀で、外に振りかぶつて待ち構へて居た彼の黒の一人の足を切つて倒して飛んで出でたものです。

これを見て大將の土方歳三が、失策た！と叫んだのも固より當に然るべき處で、人違ひの失策もあらうが、島田虎之助が其の頃第一流の劍法であつた事を知らない筈はない。

併しながら新徴組に集るほどの者で、名を聞いたばかりで聞き怖ぢするやうな者は一人も無かつたのです。また此處までやりかけて人違ひでしたかさうでしたかと引込むやうな人間は一人も無かつたのです。彼等は皆一流一派に傑出した者共で、無事に苦んで其の腕の悪血が取りたさに此の團體に入つた位でしたから、人違ひなどは太した問題では無く、寧ろ劍法に於て當代一の極め付の島田虎之助を突き出した事を勿怪の幸と感じた位のものであります。

其の中にも、岡田彌市と共に後詰の役を引受けた机龍之助は、又しても思ひがけず島田虎之助を聞いて、親の敵に出會つたやうに肉が

ブリ／＼と動きまゝす。彼はやゝ離れた物蔭に、島田の構を凝と睨んで立つてゐる。

何にしても人違ひは人違ひに相違ない、先方の名乗を受けて土方は何と云ふか

「殺れ！」

土方歳三は退引ならぬ決断で火蓋を切つたものです。

「エイ」

銀山鐵壁を裂く響、山谷に答へ心魂に徹して、何とも形容の出来な
いすさまじき氣合と諸共、夜の如く静かであつた島田虎之助は颯風
の如く飛ぶよと見れば、たゞ一太刀で僅かに一步を踏み出した新徴
組の水島某は肩先より雪を血に染めて魂は浄土へ飛ぶ。

島田虎之助は水島を切つて落して、飛び抜けて彼方の立木を後ろに

平青眼。

げに夜深くして猛虎の聲に山月の高さ島田の氣合に、さしも新徴組
の荒者が五體ビリ／＼と麻痺します。

と見れば、大塚某は片手を打ち落されて折り重なつて雪に斃るゝ時
島田の身は再び元の扉を後に平青眼、幾んど瞬きをする間に剛の者
二人を斬つて捨てたのです。

島田虎之助は劍禪一致の妙諦に參し得た人です。もと豊前中津の人
若い時は氣が荒く、やゝもすれば人を凌辱し輕佻と思はれる位でし
たが、劍の筋は天性で、廿歳の頃は既に免許に達して居たといふこ
とであります。

藩を浪人して諸國を修業し、武術に限ることは無く、凡そ一藝一道

に秀でた者は洩れなく訪ねて練上げたもので、流儀の根本は直心陰です。

その後、剣道の至り盡せぬところに禪機の存する事を覺つて、それから品川の或る禪州寺へ參禪し初めたのが卅歳前後の事であつたと申します。それから五年の間一日も缺かす事なく、氣息を調へ、丹田を練り、遂に大事を畢了しました。

參禪以後は人間が一變したといふことで、以前の輕佻粗暴は其の面影もなく、自ら至人の妙境が現れて來たさうです。

劍を取る時は平青眼に凝と着けて相手の眼を瞞めながらチリ、と進む、それに對すると如何なる猛者も身の毛が豎つたさうであります。チリ、と柔らかな劍のうち測り知られぬ力が籠つて、若しも當の相手が不遜な舉動をでも示さうものなら、その柔らかな衣が一時

に劍落して、鬼神も避け難き太刀先が現れ來るので、觀てゐる人すら屏息して手に汗を握るといふ、恐らく此の人は其の當代隨一の劍であつたに止まらず、古今を通じての大名人の一人であつたと信じて置いて宜からうと思ふ。

飛び込んで斬つて飛び抜ける、或は飛び込んで斬られて斃れる、斯様な場合に於て刀の働きは此の二つより外は無い。

「エオ」

例の氣合のかゝる時は島田虎之助の身は圍みを破つて敵の裏に出でた時で、その時は既に新徴組の一人二人は斬られてゐるのです。敵も人形ではない、命知らずの荒武者に然も一流の腕を充分に備へた血氣盛りです。それが二太刀と合すことなくズンと斬り落される

餘りと云へば果敢ない事です。

既に五人を斬つて捨てた島田虎之助は、また彼の塀際に飛び戻つて悠然たる平青眼の構。

併し感心なのは、さすがに新徴組で、眼の前にバタ／＼と同志が枕を並べて斃されても一人として逃げ腰になつて崩れの氣勢を示すものがない事です。島田虎之助を虎にたとふれば、これは常に肉を争う狼の群です。

ひとり机龍之助は呆然と立つて此の有様を少し離れた物蔭から他事のやうに見てゐます。

島田虎之助と別れた高橋伊勢守は、神樂坂の屋敷へ歸つて清川八郎と話をしてゐる處へ、此の注進が傳はりました。

「はて不思議じや、今の世に島田を覘ふ命知らずがありとも覺えぬに」

清川八郎が此の時ハタと膝を打つて

「さあその黒装束の一隊こそ正しく新徴組、これは片時も猶豫なり難し」

「新徴組なりや島田を覘ふ筈がない、こりや人違ひじやな」

「乗物の取り違へから拙者を恨む新徴組の奴ばらが、誤つて島田先生を襲うたに相違ござらぬ」

清川は一刻も斯うしては居れぬ

「人に斬られる島田ではないが……」

と云つて高橋伊勢守も静かに立ち上がる。

間もなく楠屋敷の門を陣笠に馬乗羽織、馬に乗つた伊勢守の側に清

川八郎がついて、雪を蹴立て、走せ出すと、從五位の槍の槍持がそれの後れじと飛んで行く。

三十一

高橋伊勢守と清川八郎とが馳せつけた時は、新坂下は戦場のやうな光景で、氣合の聲は肉を争ふ猛獸の吼ゆるが如く、谷から山に徹へる、雪と泥とは縦横に踏みにじられた中に、右に左に折り重なつて斃れた人の體が五つ六つは一目に數へられる、血の香は紛として鶯谷に満つるの有様です。

塚を背後に平青眼に構へて、前には少くともまだ十人の敵を控えた島田虎之助の姿を見るや、清川八郎が太刀を抜いて新徴組の中へ切

り込まうとするのを、馬から下りて從五位の槍を槍持の手から受取つた高橋伊勢が

『人に斬られる島田でない、こゝにて見物せられい、差出で、は邪魔になる』

清川を制して

『仙助この提灯を持て』

提灯を上げると、そこらあたりが薄月の出たほど明るくなる。

『エイ』

島田の氣合、バタと雪に倒れるもの二人

『エイヤ』

新徴組の入り亂れた氣合、一旦バツと離れてまた取り圍んだ人の數を數へて見れば靡るに六箇は慥かです。

島田虎之助の斬り捨てたのが此の時既に七人です。如何に達人なりとも七人の人を斬れば多少の疲れを隠すことは出来まい、また如何に名刀なりとも、これほどの斬合に痛まぬ筈はあるまい、不思議な事には島田虎之助は一人斬つても二人斬つても構へが些とも崩れない、三人斬つても四人斬つても呼吸に少しの變りが無いのです、若し明るい日で見たら、彼の面の色も餘裕綽々として子供を相手にしてゐるほごに見えたかも知れません。

併し乍ら新徴組もやはり豪らい事は豪らい、これほどにならぬ前に逃げ出すのが當り前です。島田虎之助とても逃げる敵を追ひもすまい、然るに味方の半數を斬られて一人も逃げず一步も引かない、この分では最後の一人が斃れるまでこの斬合は續くであらう。それといふのが彼等は皆拔群の使ひ手で、我こそ島田を斬らむ我こそく

といふ自負があつたからです。

こちらから見てゐると一際じつと静まり返つて、しばらく天地が森閑として冴え渡ると

『エイ』

互の氣合が沸き返る、人は繚亂として飛ぶ、火花は散る、及は閃めく、飛び違ひ走せ違つて、また一際納まつた時、寄手の人の影はもう三つばかりに減つて居ます。

島田虎之助はと見ればこれは前と變らず平青眼。

地に斃された人の數はこの時既に十一を數へられて、そして殘る處の新徴組は都合四人。この四人は皆名うての者です。

机龍之助と共に高橋伊勢守に當る手筈であつた岡田彌市といふのは小野派一刀流で其頃有數の劍客です。いま一人加藤主税といふは溝

口派で有名な道場荒らし、江戸中に響いてゐた達者で剛力です。いざや島田を斃すは我一人と、井上真改の太刀を振り翳して飛び込んできたのを、島田虎之助の志津三郎は軽くあしらつて發止と兩刀の合うところ、こゝに鏢競合の形となりました。

加藤主税は炎を吐くやうな呼吸と雷のやうな氣合で、力に任せて鏢押しに押し来ると島田虎之助はゆるくと左へ廻る。兎にも角にも、今までの斬合で島田と太刀を合せて鏢競合まで来たのは加藤一人です。それを見て居た岡田彌市は何と思つたか太刀を振りかぶつて丁度島田虎之助の背後へ廻り、やつと拜み討、

見て居た高橋伊勢守が此の時はじめてひやりとしました。

島田虎之助は前後に剛敵を受けてしまつたのです。前なる加藤主税が曳と一押し、鏢と鏢とが揉み碎けるかと思へたところ

「エイ」

組んだる太刀が島田の氣合で外れたかと思へば電光一筋

「うひん——」

井上真改の一刀は鏢元から折れて彼方に飛び、水もたまらず島田の一刀を肩先に受けて凄まじき絶叫をあとに残して雪に斃れる。それと間髪を容れず後から廻つた岡田彌市の拜み討。島田虎之助は加藤主税を斬つたる刀を其の儘身を沈めて斜横に後ろへ引いて颯と拂ふ理屈も議論もない、人間を腹部から上下に分けた胴切りです。

一太刀を以て前後の敵を一時に斬る、これを鬼神の働きと云はずして何と云はう、高橋伊勢守がこの時はもうすつかり島田の手腕に敬服してしまつて、こゝは劍ではない禪であると生涯歎稱して已まなかつたとの事。

机龍之助は何をしてゐる、心臆れたか、逃げ出したか、いや／＼まだ最前の處に立つてゐる。

龍之助が出なければ残る處は大將の土方歳三たゞ一人です。

土方歳三も豫ねて島田の噂は聞いて居たが、これほどの人とは思はなかつた。併し斯うなつても持つて生れた氣象は屈する事なく、透かさず斬り込んで來た度胸には島田虎之助も感心しました。

「はゝあ、あれが土方歳三じや」
高橋が清川を顧て云ふ。

「如何にも土方、惜しいものじや」

清川八郎は土方歳三をよく知つて居る、日頃一廉の人物と見て居る處から、こゝで島田の爲に斬られることが自業自得とは云ひながら惜しいと思ふのも人情です。

二人が土方の噂をしてゐる途端

「おうー」絶望の叫びで土方は島田の爲に太刀を打ち落されてなぢろぐ處を犬の子を轉がすやうに引き倒され起き上がらうとした時は、島田の膝は背の上に宛ら盤石を置いたやうです

「汝は何者じや」

「.....」

「名乗れ」

「斬れ」

「汝が主謀であらう、血氣に任せて要らぬ腕立て、心なくも此の島田に殺生させた、こゝに枕を並べた者共も皆一角の劍術じや、むざ／＼犬死させて何と言譯が立つ愚者奴。」

「一生の不覺、一生の不覺」土方歳三は血の涙をこぼして

「幼少より剣を學んで……御身ほどの達人を見分ける眼が無かつたは……それが残念」

島田虎之助は、この時抑へた膝を寛めて
「剣は心なり、心正しからざれば剣も正しからず、剣を學ばん者は心を學べ」

斯う云ひながら土方歳三の襟髪を取つて突き放すと、よろくと彼方に飛んで控と倒れまゝす。

三十三

高橋と島田と清川とが談笑しつゝ行く後ろ影を見送つて、やはり然として立つてゐるのが机龍之助でした。

龍之助は術も魂も打ち込んで見惚れてしまつたのです。前にも後にも此の様な鮮やかな手筋を見た事がない、見やうとて見られるわけのものでもない、最初には何を島田が！次にはあゝ思つたより牙えた腕！その次は凄い！最後には神か人か！

だん／＼に變化して行く心のうつり目が、彼の前後の敵を一刀に斬り捨てた處に至つて言句も思慮も及ばなくなりました。さうして最後に到着した結論は「我遂に此の人に及ばず」です。

この結論は龍之助にとつて生命をむしり取られるほどに辛い、けれども、この手を行つても此の外に打つ手はない。

この時やう／＼起き上がったのが土方歳三で、彼は悲憤の涙で男泣きの體です。打ち落された刀を拾ひ取つて同志十三人の死屍縦横たる中へ坐り直し、刀を取り直して腹に突き立てやうとする。

愕然として醒めた机龍之助は走り寄つて土方の刀を添えまします。

大菩薩峠 (甲源一乃流の巻、了)

大菩薩峠

新田山の巻

中里介山著

一

「濱、雪は積つたか」

炬燵に假睡してゐた机龍之助は、ふと眼を開いてだるさうな聲。

「はい、さつきから少しも止まず、御覽なされ五寸も積りました」

「うむ……大分大きなのが降り出した」

「大きなのが降ると程なく止むと申します」

「この分では中々やみさうもない、今日一日降りつゞくであらう」

「降つてゐるうちは美事ではありますが、降つたあとの道が困りますなあ」

「あつが悪い——」

龍之助は、横になつたまふ、郁太郎に乳を含ませてゐる向ひ合ひの炬燵越しにお濱を見て

「あつどの悪いものは雪ばかりではない——浮世の事は皆んなそれじや」

今日は龍之助の云ふことが、いつもとは變つてしほらしく聞えます

「ホ、里心がつきましたか」

お濱は軽く笑ひます。

「ごうやら酒の酔もさめかけたやうな——」

龍之助はまた暫らく眼をつぶつて言葉を休めてゐましたが

「濱、甲州は山國なれば定めて雪も積ることであらう」

「はい、金峰山嵐が吹きます時などは、わたしの故郷八幡村あたり

は二尺も溜ることがあります」

こんなことを途切れ／＼に話し合つて、雪を外に今日は珍らしくも夫婦の中に春風が吹き渡るやうに見えます。

悪縁に結ばれた夫婦の中は濃い酒を絶えず飲みつゞけてゐるやうなもので、飲んでゐる間はお互に酔の中に解け合つてしまひますけれども、それが醒めかけた時はお互の胸に堪まらないほどの味氣なさが湧いて來ます。その故に或時は二人の間に死ぬの生きるのといふほど揉め出すかと思へば或時は水も洩らさぬほどの悲しみが見えるのです。

「坊は寝たか」

「はい、すやくと寝入りました」

「酒はまだあるか」

「まだ有りませう」

「斯う降りこめられては所在がない、また酒でも飲んで昔話の蒸し返してもやらうかな」

「それが御無事でござんせう」

お濱は寝入つた郁太郎を、傍へにあつた座蒲團を引き寄せて其の上にとつと抱きおろし炬燵の蒲團の裾をかぶせて立たうとすると、表道で爽やかな尺八の音がします。

「あゝ尺八」

龍之助もお濱も遽に起つてさうして此のしんみりした雪の日、人の心を吸ひ入れるやうな尺八の音色に引かれて静かにしてゐると、その尺八は我が家のすぐ窓下に來て冴えくした音色を恣にして、いよく人の心を暖るやうです。

「よい音色じや、合力をしてやれ」

お濱が鳥目を包んで出すと、外では尺八の音色がいよくさやかに聞えます。

お濱は臺所に行つてゐる間、龍之助は寝ころんだまゝで、その尺八を聞いてゐます。

しほの山

さしでの磯に

すむ千鳥

君が御代をば

八千代とぞ鳴く

餘音を残して尺八が行つてしまつたあとで龍之助は再びこの歌をうたつて見ました。

しほの山

さし出の磯に

すむ千鳥……

そこへ銚子を持つて来たお濱が

君が御代をば八千代とぞ鳴く

と立ちながらつづけて莞爾と笑ひましたので龍之助は

「よく知つてゐる」

「故郷の事ですものを」

「故郷とは」

「しほの山とは鹽山の事、差出の磯はわたしの故郷八幡村から日本

部へかゝる笛吹川の岸にありまする」

「あゝ左様であつたか……」

しほの山、さしでの磯に……

龍之助は無意識に歌ひ返して見ました。

「こゝに居て笛を聞くのは風流でござんすが、この寒空に外を流し

て歩くお人は嘸つらい事せう」

お濱も炬燵に、つめたくなつた手を差し入れて

「それも若い者ならば兎も角も、今の虚無僧のやうに年を老つた身

では」

「兎角風流は寒いものじや——」

龍之助は起き直り、お濱の與ふる盃を取り上げて一口飲み

「親父も尺八が好きであつたがな」

「あの彈正様が」

「さうじや、親父は頑固な人間に似合はず風流であつた、詩も作れ

ば歌も咏む』

龍之助が父の噂をしんみりとやり出したのは恐らく今日が初めてとせう。

「この寒さは定めて御病氣に障りませう」

「うむ——」

龍之助にはこのごろ初めて父の事が氣にかゝるやうになつたらしい。島田虎之助を極力賞めてゐた父の言葉が、昨夜といふ昨夜、漸く合點が行つて見ると、父は矢張り眼の高い人であつた……それで自然今までに出なかつた父の噂が唇の頭に上つて來るのです。

「御無事で居られますることやら、世間さへ無くばお見舞に上らうものを」

お濱の附け加へたる言葉は龍之助の歸心を暖るやうに聞えたか

「濱——」

「はい」

「二人で一度故郷へ歸つて見やうか」

「あのお前様が澤井まで……」

「うむ、最初には甲州筋から、そなたの故郷八幡村へ、あれより六菩薩を越えて見やうか」

「それは嬉しいことでござんすが——萬一の事がありましたは」
お濱の面には掛念の色が浮びます。

「忍んで行けば大事はあるまい」

「お詫は叶ひませぬか」

「所詮」

「あの澤井のお邸にお住りになればごんなに肩身が廣いでせう」

「淺はかなことを云ふな、生涯あの邸には住はれぬ」

「もう土地の人とても大方は昔の事は忘れたでござんせう」

「いや、あのあたりに住む甲源一刀流の人々は今だに拙者を根深く恨んでゐるに相違ない」

「もとはと申せば試合の怪我、そんなに根深く思ふものはござんすまい」

龍之助は答へず、暫らく打ち吟じて、思ひ出したやうに

「濱、文之丞には弟があつたさうな……」

「文之丞の弟、はい兵馬と申しまする」

「その兵馬——それは今何處にゐる」

「わたしが出るまでは番町の親戚に居りました」

「歳はいくつになるであらう」

「左様、數へ歳の十七位」

「その兵馬は定めて拙者を善くは思ふまい」

「まだ子供でござんすものを」

「怖れるといふことはないが……聊か心がゝりになる、今もその番町の親戚とやりに居るか、折もあらば聞き届けて置くがよい」

「若し兵馬がお前様を仇と覘つてゐたら何となされます」

「仇呼ばゝりをしたらば討たれてもやらう——次第によつては斬捨てゝも呉れやう」

「それは不憫な事、兵馬には罪がない」

お濱の本心を云へば兵馬に憎らしい處は少しもない、兵馬に取つては自分は親切な姉であつたし、自分に取つては兵馬は可愛ゆい弟です、その心持はどうしても取り去ることは出来ないのですから、

一兵馬が龍之助を覗うやうな事があらば、龍之助の爲に返り討に遭うは知れた事、その事を想像するとお濱は兵馬が不憫で堪らなくなります。

「拙者を仇と覗うものがありとすれば、それは兵馬一人じや、同流の門下等は拙者を悪みこそすれ、拙者に刃向ふほどの大膽な奴はあるまいけれど、文之丞には肉身の弟なる兵馬といふものがある以上は、子供なりとて枕を高くはされぬ」
仇を持つ身の心配を今更こゝに打ち開けて

「兵馬さへ無くば父に詫して故郷へ歸ること……」
兵馬さへ無くば……その言葉の下には兵馬を探がし出さば亡き者にせんとの考があればこそです。お濱はこゝに云はん方なき不安を感じ初めました。

文之丞を亡き者にさせたのは誰の仕業であつたらう、また兵馬をも同じ人の手で同じ運命に送らねばならぬとは——お濱は戦慄しました

「吉田氏御在宅か」

外から呼びかけた聲

「おゝその聲は芹澤氏」

龍之助はくるりと起り上ります。客は新徴組の隊長芹澤鴨。

芹澤鴨と机龍之助とは一室で話しを初めてゐます。さほど広い家でも無いから次の間ではお濱が客を待遇す仕度の物音が聞える、お濱

の方でも二人の話聲がよく耳に入ります。

「時に吉田氏」

芹澤の聲が一段低くなつて

「昨夜のさまはありや何事じや」

「何とも面目がない」

「土方奴も青菜に鹽の有様で立歸り近藤に話すと近藤奴火のやうに怒り、今朝未明に島田の道場へ押しかけたが、やかて這々の體で逃げ歸り居つた」

「聞きしに勝る島田が手腕」

こゝにも亦机龍之助の吉田龍太郎が、しほれきつてゐるので芹澤は安からず

「この上島田を斬るものは貴殿の外にない、是が非でも島田を斬ら

ねば新徴組の面目丸つぶれじや」

「併し本來を云へば島田には何の怨みもない、落度は此方にあるから自業自得じや」

「さうでない、我々同志が敵でもあり公儀に取つても油斷のならぬ島田虎之助、是非共命を取らにやならぬ」

低く話すつもりでも高くなり勝な芹澤の聲音。

次の間で仕度を済ましたお濱は穩やかならぬ話の容子が心配なのでそつと郁太郎の傍に添寝をしながら二人の話を立聞き——いや寝悶きです。

お濱は斯うして次の間の話を盗み聽きしてゐると、それから話し聲は急に小さくなつて聞き取れません。

お濱は近頃龍之助が夜の歸りも遅くなり、時は酒に酔うて歸るこ

とが多いので、それも心配の一つ、殊にいづれも一癖ありさうな浪人者とはかり往來することが心がりでなりません。今來た客といふのも浪人組の隊長株であるや、最前話の通り故郷へ引籠むことが出来れば、龍之助の心も落着いて、酒を飲むこと氣が荒くなることも止み、浪人者との往來も少くなるであらう。

低い聲で龍之助と芹澤とが話し合つてゐるうちに折々近藤とか土方とかいふ人の名が聞えます。土方歳三といふ人は劍術の出来る人でもとの夫、文之丞とは往來のあつた人、この頃どうかすると龍之助の口からその名前を聞く、また近藤勇といふ人も、八王子の天然理心流の家元へ養子になつた有名な荒武者であつて、これも龍之助が近頃懇意にしてゐるやうです。それ等の名前を聞きとがめては色々氣にしてゐると

「吉田氏、貴殿は宇津木兵馬といふ者を御存知か」

芹澤の口から出た兵馬の名、お濱はハツとしました

「ナニ宇津木！」

龍之助の言葉も氣色ばむ

「如何にも其の宇津木兵馬といふ者が貴殿を仇と覘ひ居るげな」

「その様な覺えが無いでもない」

龍之助はさのみ驚かず

「その宇津木兵馬に近藤土方等が助太刀して近いうち貴殿の首を取りに来るさうじや」

あり／＼と聞き取つたお濱は我を忘れて障子際に耳を寄せやうとすると乳房がよく寝てゐた郁太郎の面を撫で、子供は夢を破られんとし、むづがつて身を動かすので、お濱はあはて／＼かゝえて綾なし

ます。

それから話はまた小聲になつて何だか聞き別けられません。暫くあつて

「然らば拙者はこれでお暇を致さう、貴殿もよく／＼考へて置き召されよ」

芹澤は斯う云ひ捨て、歸るらしいから、お濱もそこを起きやうとする。

「その宇津木兵馬は何れに居るか、在所は」

立つ芹澤を引き止めて問ひかけたのは龍之助の聲です

「それは明かされぬ、それを明かしてはあつたら少年が返り討になる、併し御用心々々々」

「うむ——」

龍之助は押し返して問ふことをしなかつたと見えます。

三

「與八さん、わたしは此のお邸で死ぬか、さうでなければ此のお邸を逃げ出すより外に道が無くなりました」

どう／＼我慢が仕切れずに、お松は夜業をしてゐる與八の處へ来てホロ／＼と泣きました。仕事の手を休めて聞いてゐた與八は

「逃げ出すが宜かんべえ」

突然に斯う云ひ出して、やがてあとをつゞけて云ふには

「俺もお前様に力をつけて辛抱するやうに云つて見たあけれど、ごつちにしても此のお邸は爲になんねえお邸だ、一その事、逃げ出し

た方が宜いだ」

「それでは與八さん、わたしは直に此れから逃げ出しますから誰にも黙つてゐて……」

「お前様が逃げ出すなら俺も逃げ出すから一緒に逃げべえ」

「與八さんお前が一緒に逃げて呉れる！」

これはお松に取つては百人力です。斯うして二人は風儀の悪い旗本、神尾の邸を脱け出す相談が定まつてしまひました。

與八と、みどりとは其の晩首尾よく神尾の邸を脱け出して

「與八さん、何處へ行きませう」

「澤井の方へ行くべえ、あつちへ行けば俺が知つてる人がいくらもあるだ」

傳馬町を真直に、二人は甲州街道を落ち伸びやうといふつもりでした。二人共あまり地理に慣れないものですから道を反對に取り返へてしまつて小石川の水戸殿の邸前へ出てしまつたのです。

「こりや違つたかな、此んな坂は無え筈だが」

お茶の水あたりへ來た時に與八はやつと氣がついて

「何でもいゝ、行けるだけ行つて見べえ」

昌平橋と筋違御門との間の加賀原といふ淋しい處へ來ると、向ふから數多の人と提灯、ごうも役人らしいので與八も困つて、前後を見廻すと丁度馬場の隅の處に屋臺店を出してゐるものがあります。これを幸に與八はみどりの手を引いて、屋臺店の暖簾をかぶると

「ゐらつしやいまし、随分お寒うございます、この分ではまだ雪も降りさうで……」

お世辭を云ふ中婆さん、まだ何處やらに水々しい處もあつて、まんざら裏店の神さんとも見えないやうでした

「みどりさん天ぶらを食はねえか」

「與八さん、お前が宜ければ何でも」

「それでは天ぶらを二人前」

「へえ宜しうございます」暫くして「はいお待遠さま」

行燈の光で器を出す途端に面と面とを見合せた屋臺店のお神さんともみどり

「おゝあなたは伯母さん」

みどりのお松は我を忘れて呼びかけました

「まあ、お前はお松ではないか」

屋臺店の主婦も呆れて斯う云ひました。

「伯母さま、どうして此んな處に」

「お前にこんな處を見られて、わたしは恥かしい」

定まりの悪さうなのも道理、この屋臺店の主婦といふのが本郷の山

岡屋の内儀のお瀧が成れの果ですもの

「伯母さん、ほんとに御無沙汰をしましたか皆様お變りもござりませぬか」

「變りのないどころじゃない、それにしてもお前もまあよく無事でゐて呉れたねえ」

「わたしも伯母さんのところからお暇乞をして後、色々な目に遭ひました」

「あの時はお前、わたしが留守なものだからつい………」
お瀧もあの時の無情な仕打を考へ出しては多少良心に愧ぢないわけ

には行かないから言葉を濁して

「まあ何にしても珍らしい處で遭ひました、お前、お急ぎでなければ、わたしの家へ来て呉れないか、ついそこの佐久間町にゐるんだから」

斯う云はれて見ると是非善悪にかゝはらず、この場合お松に取つては渡りに船です。

「わたしも伯母さんに御相談して戴きたいことがありますから、お差つかへなければ、お邪魔にあがりませう、ねえ與八さん、このお方はわたしの伯母さんなの」

「さうでしたかえ、今晚は」

さき程から二人の有様をながめて怪訝を面をして箸を取り落してゐた與八、引き合はされて取つて附けたやうな挨拶でした。

この伯母さんに引張られて二人は佐久間町の裏へ来て見ると、八軒長屋の、こつちから三つ目の家。

伯母は委しく身の上を語ることを避けたがつてゐたが、その話の筋は山岡屋は最初泥棒に入られ、それから番頭に使ひ込まれ、次に商賣が大損で、とうとう瓦解してしまつたといふことです。それから瓦解と前後して主人の久右衛門が死んだ、残る處は借金ばかり、出入の親切な人に助けられて、今では其の人と一緒にゐるといふことを伯母が涙ながらに語るものだから、お松もついでに自分の身の上を打ち明けて、邸を逃げ出して来たことまで隠すことが出来なくなりました。

「心配をしでない、これからのお前の身の上はわたしが引受けるから」

と伯母が云つたが、これは餘り押しの良い言葉ではないのですけれども、斯うなつて見れば此の人を頼りにせねばならぬ。

幸、一軒置いた隣が明いてゐたから與八とお松とは、それを借りて隠れるといふことに其の夜のうちに相談が定まりました。

その翌朝になると、お松の頭が重くて熱がある、つとめて起きて見たけれども、遂に堪へられないで、どつと寝込んでしまひました。

お瀧もやつて来て心配さうな面をするが、それよりも與八の心配は容易なものではないのです、醫者を呼ぶことはよして呉れど、逃げて来た手が、りを怖れて、お松が頻りに止めるものだから

「それでは風邪薬でも買つて來べえ、それ蒲團を頭の處からよく被つて居ねえと隙間から風が入る」

與八はお松に夜具を厚く被せてやつて、風邪薬を買ひに出かけると

それと行き違ひのやうにやつて來たのが伯母のお瀧です。

「お松、氣分はいゝかい、さつき持たしてよこした玉子酒を飲んで見たかい」

「はい、どうも有難うございました」

「與八さんは何處へ行つたの」

「買ひ物に行きました」

「さうかい——」

お瀧は枕許へ寄つて來て、お松の額に手を當て

「お、中々熱がありますね、大切にしなければ……それからねお松」

お瀧は言ひ悪くさうに

「お前、何かね、お鳥目を少しお持ちかね」

「はい——」
 「お持ちならばね、ほんとに申しにくいけれどね、商賣の資本に差
 しつかえたものだからね、少しばかりでよいから融通して貰へまい
 かね」

「エ、宜うござんすども」

お松は快く承知して

「済みませんけれど伯母さん、其の手文庫を……その中に包みが
 ありますから封を切つて、お入用だけお使い下さいませ、澤山はご
 ざいませんけれど」

「さうかい、わたしが手をつけて宜いかい、濟まないねえ、それで
 は調べて見ますよ」

お松が神尾の邸を逃げる時持つて出た自分の手文庫、お瀧はその蓋
 を取つて

「まあ大へん綺麗なものがあるね、これは短刀かえ、錦の袋なんぞ
 に入つてさ、これがお金の包み、まあ驚いた小判だね、それではお
 前、この中を二兩だけ借りて置きますよ、ほんとに濟まないね、お
 禮を申しますよ、それから何でも、お前不自由があつたら遠慮なく
 さうお言ひ、我儘を言ひ合ふやうでないと親身の情がうつらないか
 らね」

お瀧が、お世辭たらしくで出て行くと、間もなく與八が歸つて來ま
 した。

お松の病氣は其の翌日になつても癒りません。與八は大へんな心配
 で枕許を去らずに看病してゐる處へお瀧がやつて來て

「だうだいお松、ちつとはい、かい、醫者に診てお貰ひよ、長者町の道庵さんに診てお貰ひ、なあに道庵先生なら心配はないよ、あの先生の口からお前の身の上が現れるなんといふことはないよ、與八さん、御苦勞だが道庵さんへ行つておゐで、この前の大通を、それ大きな油屋があるでせう、あの邊が相生町といふのだから、その相生町の角を真直に向ふへ行つてごらん、小笠原様のお邸がある、そのお邸の横の方が長者町だからね、あの邊へ行つて道庵先生と聞けば子供でも知つてゐるのだよ……それからあの先生にお頼み申すにはね秘訣があるのだよ、その秘訣を知らないと先生は來て呉れないからね」

お瀧は手ぶり口ぶり忙がしく與八に説いて聞かせる。

「その秘訣といふのはね、貧乏人から参りましたが急病で難澁して

居ります、ごうか先生に診ていたときたいたのでござりますと、斯う云ふんだよ、貧乏人と云はないといけないよ、金持から來たやうな風をすると先生は決して來て呉れない、いゝかえ、貧乏人から來ましたと云ふんだよ」

「そんなに貧乏が好きなのかい」

「貧乏が好きといふわけじゃ無いんだらうけれど、其處が變人なんだよ、それからいつでも酔ばらつてゐる先生だからそのつもりで」お瀧は喋りつゞけて所謂道庵先生の處へ與八を出してやつたあとでまたそろそろとお松の枕許に寄り

「お前ほんとに濟みませんがね、今月の無盡の掛金に困つてゐるものだから……」

お松の持つてゐた金は、もう此の氣味の悪い伯母に見込まれてしま

つたのです。

四

何處へ行くのか知らん。机龍之助は七つさがりの日を脊に浴びて神田の御成街道を上野の方へと歩いて行きます。小笠原左京太夫の邸の角まで來ると

「わーっ」

突然横合から飛び出して龍之助の前にガバと倒れたものがあります。龍之助も驚いて見ると、慈姑のやうな頭をした醫者が一人、泥のやうに酔うて

「やあ失禮々々」

起きやうとするが腰に力が入らない可笑しさ、やつとの事で起きて、面を上げると、龍之助も吹き出さずには居られなかつたのは、いゝ年をしたお醫者さんが、潮吹の面をかぶつてその突き出した口をヒョイと龍之助の方に向けたからです

「起きなさるがよい」

龍之助は苦笑ひしながら醫者の手を取つて起してやると

「失禮々々」

骨なしのやうにグデン／＼で、面をかぶつたまゝでお辭儀をするのが、いかにも可笑しい、それと見た近所の子供連中が「ヤァ／＼と寄つて來て

「やあ道庵先生がひよつとこ面をかぶつてらあ、可笑しいなあ」

「先生、その面をあたいにお呉れよう」

「おちさん、あたいにお呉れよう」

醫者の周圍を取り巻くと

「面こは一つしか無いぞ。お前等皆んなに別けてやれない」

「それではおちさん、じやん拳をして勝つたものにお呉れよう」

「じやん拳でも何でもやれ〜、わーっ」

また龍之助の前へ倒れかゝらうとする、龍之助はまた支える

「やあ、失禮々々」

往來の人は歩みを止めて集まつて來る、龍之助は厄介な者につかきつたと當惑し

「これ子供たちや、このおちさんは何處の人じや」

「これは道庵先生といふて長者町のお醫者さんじや」

「此の様に酔うては難儀じや、誰か邸まで沙汰をして呉れ」

「ナニおちさん、大丈夫だよ、この先生はいつで歸つばらつてるんだから放つとけば一人で歸るよ」

「やーい子供、踊れ〜、踊りの上手な奴にこの面こをやるぞ、そらこんな風に踊れ」

面をかぶつたまゝ章魚のやうな格好をして踊り出したので、往來に見てゐたものが一度に吹き出します。龍之助はそれをしほに振切つて新黒門の方へ行く

龍之助が新黒門を廣小路の方へ廻らうとする時分に、摺れちがった人があります。龍之助の方では氣がつかかなかつたが、先方ではふいと歩みをとどめて二三間行き過ぎた龍之助の姿を見送つてゐる、それは宇津木兵馬でした。

兵馬は龍之助に會つて「ハテ見たやうな人」と思ひます。併し急に思ひ出せなかつたので、空しく見送つたばかりで尙ほ思ひ出さうとつとめたが、一丁ほど隔つた後

「あ、それ、いつぞや島田先生の道場で試合をした人」と漸く考へついで

「慥か江川太郎左衛門配下といふたが……妙な劍術ぶりであつた」あの時の試合、例の龍之助が音なしの構の不思議であつた事を馬は思ひ返して

「先の勝で小手を取られた、いかにも……」乃先に見えた、も一度あの人と立合をして見たい」

兵馬は胸に斯う考へながら「あの位に出来る人なれば相當に名ある者に相違あるまい、はてあ

の時は何と名乗つた、お、それ吉田なにがしといふたか、吉田なにがしと申す劍客はあまり聞かぬ……假名ではあるまいか」

兵馬はうつらうつらと歩みつゝ「見受けるどころ、浪人のやうにもあるし……」

斯う考へて来て何やら穏やかならぬ雲行が兵馬の胸の中に起り出し「待て——机龍之助が得意の手に音なしの構といふのがある」と

あの吉田なにがしの手は——あれは音なしの構ではあるまいかしら音なし、ひ、さう思へばいよ、思ひ當る、あの年頃は三十三四

龍之助、龍之助、あれが兄のかたき机龍之助ではあるまいか」兵馬の心を貫く暗示、何等の證據があるわけではないが、斯う思ひ

來ると、今摺れ違つたのが、どうも龍之助らしい！兵馬は踵を廻して黒門の方へ取つて返さうとする

「わーッ」

また横合から飛び出して兵馬の前に倒れたのは彼の道庵先生です

「やあ失禮々々」

そのあとをついた子供等が

「おぢさん面をお呉れよう」

いゝ年をした男が、ひよつとこの面をかぶつて来たから兵馬も笑ひ出して、それを避ける途端に道庵はころ〜と往來へ轉がつてしまひました

「やあ先生が倒れやがった、起せ〜」

子供等は寄つてたかつて道庵を起し

「お家へ擔いで行かう、わつしよ〜」

この騒ぎで宇津木兵馬は机龍之助の姿を見失つて、その日はそれで

歸りました。

五

お松の病氣も大分よくなりました、快くなつたとは云ふものゝ半月あまりも寝たことですから、其の間の興八の骨折といふものは大したものでありました。

伯母のお瀧は例の如く空お世辭を云つては金を借りて行き、その金を亭主の小遣錢にやつたり自分等の口へ奢つたりしてしまつたのでお松の病氣の癒つた時分には、持つてゐた金はほとんど借りられてしまつたのです。

お松は蒲團の上へ起き上つて亂れ髪を掻きあげてゐますと、お瀧が

またやつて来て

「お前、漸く癒つて宜かつたねえ」

「はい、お蔭様で」

「これといふも、わたしが湯島の天神様へ願がけをして上げたのとそれから道庵先生のお蔭だよ」

「はい」

「それから今日はお前、天神様の御縁目だからお禮詣りに上らなくては済みませんよ」

「はい」

「近い所だけれども、また無理をするといけないから駕籠をそいつで上げるよ」

「いゝえ駕籠には及びません、歩いて参りませぬと信心になります」

「まいから」

「そんな事があるものかね、歩いて行かうと駕籠で行かうと信心どころさへ確かならねえ……それはさうとお前」

お瀧の言葉が改まる時は、その後に来るのはいつも金の事ですからお松はヒヤリとすると案の定

「道庵先生への薬禮はどうなさるつもりだえ」

「伯母さま實を申上げれば今のところ……」

「もうお金は無いのかい」

「え……」

面を赧らめてゐると伯母は

「わたしの方でも、お前に大分借金がありますが、今々といふわけにも行かず、困つたねえ」

困つた面をして

「道庵先生はあゝいふ變人だから、少し位延びたつて何とも思ひなさりやしますまいが、それならそのやうに尙更早くお禮をしないとそれにお前だつて、これから身を定めるには物要がつゞきますからね、何とかしなければ」

「左様でございますね」

「あのね、あんまり立入つたことだけれども、お前何か金目の物を持つてゐやしないかね、賣るとか質に入れるとかして纏まつたお金の手に入るやうなものを」

「それはどうも」

「あれは何だね、お前あの手文庫の中にあつたもの、錦の袋に包んだ短刀のやうなもの、あれはお金になりさうだね」

お瀧が早くも眼をつけたのは、やつと昔、お松が裏宿の七兵衛から貰つた藤四郎の短刀です。

お松は返事に困つて、この伯母といふ人の性根が何處まで卑しくなつたかと、それを悲むのみであります。

お瀧が其の品を道具屋に見せてごらんとすゝめて歸つたあとで、お松は思ひ出したやうに、手文庫を調べて錦の袋に入れた短刀を取り出して鞘を拂つてながめました。

暫らく手入れをしなかつたが名刀の光は曇らず、それを見てゐると過ぎにし年の大菩薩峠の悲劇があり／＼と思ひ出されるのです。斯うして短刀をながめながら、ひとりつく／＼思案に耽つてゐると

「これお前様、心得違えをしてはなんねえ！」

後ろから殺びついてお松の兩手を抱きすくじたのは、薬取りから籠

つた奥八です

「飛んでも無えことだ、刀物なんぞを持つて」

「奥八さん、勘違へをしてはいけません、たゞ斯うしてながめておたばかりよ」

お松は奥八の驚き方が、あまりに大仰なので可笑しくなつたのです。が、奥八はまたお松が永の病氣から身の上を悲観して自害でもするつもりと勘違ひをしてゐるので、お松の手から短刀をもぎ取つて

「危ねえ、こりや俺が預かる」

奥八は鞘を拾つて納めて包み直すと、お松は微笑して

「あゝ、それではお前さんに預けて置ませう………それよりは「層の事」

お松は、この時ふと賣つてしまはうかといふ氣になつて

「そんなものを持つてゐると危いから、一層賣り拂つてしまひませう、奥八さん御苦勞ですが刀屋に見せて来て頂戴」

「お前様これをお賣りなさるのか」

「賣つてしまひませう」

「それでも大切の品だんべえ」

「大切といへば大切だけれど、奥八さん差し當りそれを賣つてお醫者様のお禮やら、これからの入用にしたいと思ひます」

「さうか」

奥八はお松から頼まれて御成街道の小田原屋といふ武器刀劍商の店へ行つて其の短刀を見せると、物言はず三十兩に價をつけられました。高々二兩か三兩と思つてゐたのに、三十兩とつけられて奥八は

暫らく返答が出来ないでゐると、番頭は曇みかけて、三十三兩と糶り上げ、與八に口を開かせないで、その金を押しつけるやうにして短刀と引き換てしまひました。

與八はその金を懐にして佐久間町の裏店へ歸つて来て、

「みどりさん、今歸つた」

「お、與八さん、御苦勞でした」

見れば、みどりは、いつの間にか髪を島田に取り上げて、燈火の影に此方を見せた風情は、今まで永く思つてゐたのとうつり變つて與八の眼をさへ驚かす位の美しさに見えました。

「思ひの外いゝ値に賣れました、この通り三十三兩」

「まあ、あの短刀がそんなに」

「あんな短けえもので三十兩もするだから、餘つほど宜い品に違え

ねえ」

「それでは與八さん、御苦勞ついでに道庵先生まで行つて御禮をして来て下さいな」

「あゝいゝとも」

「御飯の仕度が出来たから一緒に食べませう」

「さうかい、お前様が仕度をして下さつたかい」

二人は膳を並べて

「さあ與八さん、お出しなさい」

「ごうも濟みましねえ」

こゝで旅費も出来たから、二人は兼ての望み通り澤井へ行つて、與八は元の水車番、お松はその傍で襷がけで動らくこと、その楽しい生活を想像しながら話し合つて、食事を終り與八は

「そんならお醫者様へお禮に行つて来るだ」

六

「何だつて、藥禮を持つて來たつて、藥禮を持つて來たら其處へ置いて行きな」

與八が訪ねて行つた時、道庵先生は八疊の間に酔ひ倒れて、良久半分に與八に返事をしてゐます。

「先生、幾ら上げたら宜いだ」

「幾ら、十八文も置いて行きねえ」

「十八文」

與八も變な面をして

「半月もお世話になつて十八文じや、あんまり安い」

「生意氣なことを言ふな、安からうと高からうと此方の賣物だ」

「先生、そんな事を云はねえで、本當の値段を云つてお呉んなさいまし」

「だから十八文でいゝのだ」

「先生酔つばらつて居なさるからいけねえ」

「酔つばらつたつて商賣に抜目は無え、早く十八文置いて歸れ」

「それじや濟まねえ」

「手前は馬鹿だな、本人の俺が十八文でいゝといふのだから十八文置いて歸つたらいゝじやねえか」

「それは先生が馬鹿だ、半月も診てもらつたり藥を飲ましてもらつたりして、そのお蔭様で病人がすつかり癒つて、さうしてお禮が十

八文で歸れるか、よく考へてごらんなさい』

『馬鹿野郎、手前は十八文置いて歸ればいゝのだ』

『でもね先生、そんなに怒らずにお聞きなすつて下さいよ、わしが家へ歸つて、道庵先生に薬禮をいくら差上げて來たと聞かれた時にね、十八文置いて來ましたとは云へなかんべえ』

『うるさい野郎だな、十八文置いてさつさと歸れ！』

『それじゃ先生、一兩置いて行くべえ』

『何だ一兩だ、手前一兩なんといふ金を何處から盗んで來た！』

『盗んで來たあと！この野郎、先生野郎』

與八はムキになつて怒り出しました

『俺、人の物を塵一本でも盗んだ覚えは無え、飛んでもねえことども云はねえ方が宜かんべえ』

『盗んだに違えねえ』

道庵先生が首を振ると與八、はいよく怒り出し

『外の事とは違うだんべえ、物を盗んだと云はれちやあ俺が面が立たねえ』

『ナニ盗んだに違えねえ』

『何だと道庵先生の野郎』

與八は飛びついて道庵の胸倉を取りますと

『この馬鹿野郎、わしに喧嘩をしかけるつもりか、喧嘩なら持つて來い』

道庵先生も與八の頭へ嚙りつきましたが、力では到底與八に勝つてつこはありません。與八は一時の怒りに道庵先生へ武者振りついて見ましたけれども、もどく悪氣があるのではないですから、持ち扱

ひ兼ねてゐると道庵先生は宜い氣になつて、與八の頭へ嚙りついた
り引搔いたりビシヤ／＼撲つたりするので、與八は弱りきつてゐる
うちに、いゝ加減與八の頭をおもちやにした道庵先生は其のまゝ其
處へ倒れて寢込んでしまひました。

與八はどうも仕方がないから、一兩の金を紙に包んで道庵先生の頭
の處に置いて、佐久間町の裏長屋へ歸つて來ました。

七

與八が佐久間町の裏長屋へ歸つて來て見ますと、お瀧の家も自分た
ちのゐる方も、どちらとも戸が締まつてゐました

「お松さん、お松さん」

呼んで見たけれど更に返事がありません。お瀧の家の方へ來て

「伯母さん／＼」

これも中ではことりとも音がしませぬ

「もう寢てしまつたんべえか、伯母さん、伯母さん」
さつぱり返事がない

「もし、お隣のお神さん」

「誰方」

「隣りの與八でござんす」

「お、與八さんかえ、何か忘れ物でもお有りかえ」

「お神さん、わしらが家の方は空つぽだが、何處へか出かけると云
ひましたかい」

「まあ與八さん、お前知らないの」

「何だね」

「何だねじやないよ、さつき伯母さんが、ちやんと近所へ御挨拶をして移轉をしておしまひじやないか」

「移轉を」

「さうさ、その前にそら、お前さんと一緒に来たお松さんといふ可愛らしい娘衆は駕籠でお出かけじやないか」

「些とも知らねえ、俺そんな事は些とも知らねえ」

與八は面の色を変えて唇を顫はせる

「まあさうなの、わたしはまたお前さんが先に取片づけに行つてお出での事と思つたよ」

「そしてお神さん何處へ引越すと云つてました」

「あのね四谷の方とか云つてましたよ、また近いうちに御挨拶に出

まゐつて」

「俺に黙つて引越すなんて……」

與八は呆れてホロ／＼と涙をこぼし

「四谷の何處へ引越したんべえ」

聲を揚げて泣き出さんばかりに見えましたが、何を思ひ出したか一目散に表の方へ走り出しました。

與八が御成街道を真直に走り出して行く

「そこへ行くのは與八ごのではないか、與八ごの」

「誰だえ」

これは今、土方歳三を柳原の金子といふ、過ぐる日、新徴組が高橋と清川とを覘ふ時會合した家に訪ねて歸る宇津木兵馬の聲でありました。

「あゝ兵馬さん」
せわしい中で立ち止まつた奥八。

八

夜が静かになると人の心も静かになります。静かになるに随つて晝のうちには取り紛れてゐたことまでが、はつきりと思ひ返され、寢られぬ時は感が嵩じて、思はでもの事までが、頭の中に浮んで來ます。聖人といふものでない限りは、誰でも自分の今までの生涯を思ひ返して、過が無かつたと立派な口が利けるものは無い筈で、人間の良心といふものは、他の欲望の働く時は眠つてゐますけれども、その欲望が疲れきつた時などによく眼を醒して「それ見ろ」と吐りまへ、

龍之助は夜中になるときつと魔されます。

お濱は今夫の魔される聲に夢を破られて、夫の寢像を見ると何とも云へず物すごいののであります。凄まじい唸りと齒を噛む音、夜更けの中うちに悪魔あくまの笑ふやうにも聞えます。お濱はぞくぞくと寒氣がして郁太郎いくたろうを乳ちちの傍そばへひたと抱寄せて、夜具やぐをかぶらうとして、ふと佛壇ぶつだんの方を見ました。

龍之助夫婦は佛壇ぶつだんなどを持たないのですから、これは前に住んだ人がこしらへ残して置いたものです。奥には阿彌陀様あみださまか何かと煤すすけた表装へうさうのまゝで蜘蛛くもの巢すに包まれてござるほどの處で、別にお濱の思おも出でになるものが此この佛壇ぶつだんの中なかにある筈はずもないのですが、この時佛壇ぶつだんがガタ／＼と鳴つてゐます。それとても不思議はない、鼠ねずみが中で荒あはれ廻まはつてゐるからです。

それでも餘りに其の音が仰山なので、お濱は

「叱」

嚇かして見ました。

それで鼠の音はハタと止まるには止まつたが、やがてバタ／＼と飛出した大鼠、お濱の直ぐ枕許へ落ちました。お濱は驚いて枕を上げて打たうとすると、度を失うた鼠は、お濱の乳房と、丁度抱いて寝てゐた郁太郎の面の間へ飛びかゝつたのであります。

「あれ！」

お濱は狼狽して拂ひのけやうとする、いよ／＼度を失うた鼠は、お濱の腹の方へ飛び込みました。

「あれ／＼」

お濱は寢床から刎ね起きます、其の途端に鼠はボンと郁太郎の面の

上へ落ちかゝると、郁太郎は火のつくやうに泣き出します。

「お、坊や／＼」

お濱は急いで郁太郎を抱き起す、鼠は其の間に襖を傳はつて天井の隅の壁のくづれの穴へ入つてしまひましたが、郁太郎の泣き聲は五臓から絞り出すやうです

「お、よい／＼、鼠は行つてしまつた」

お濱は抱きすかして乳房を含めやうとすると、その乳房の脊に一痕の血

「貴夫、お起き遊ばせ、大變でございます」

お濱は片手には泣き叫ぶ郁太郎を抱えて、片手を伸べて無二無三に龍之助を突き起します

「何事じや」

眼をさました龍之助、郁太郎の泣き聲にも驚かされたが、自分の身體の手の觸るゝ處が、水で漬けたやうな汗であるのにも驚きました
 「よく見て下さいまし、坊やが鼠に噛まれました」
 「ナニ鼠に」
 「はい、大きな鼠がああ佛壇から出て、この中に潜りこんで坊やに食ひつきました」

「どれ〜」
 龍之助は起き上つて燈心を掻き立て、郁太郎の身體を調べて見ると咽喉に一文字の創、別に深い創ではないが、そこから血がにじんで、蚯蚓ぐらゐの太さにガラ〜と落ちて行くのです
 「咽喉を噛まれました」
 お濱は狂氣のやうに叫びます

「大事はない、早く血を拭いて創をよく巻いてやれ」
 龍之助は有り合せた晒木綿の断ち切れを取つてやる
 「針箱の抽斗に膏藥がありますから早く早くして下さい」
 「焦くなよ」
 「まあ焦れつたい、その右の小さい方の小抽斗」
 「これか」
 「水でよく創を洗つてやりませう、良人お冷水を」
 お濱は何もかも夢中で騒いでゐます。漸く水で拭き取つた創のあやを洗つてやる、その間も郁太郎は苦しがつて身を悶掻いて泣く
 「いゝよ〜、坊や痛くはないよ、さあもう少し」
 やつどの事で創を洗つて、膏藥を貼つて晒で首筋を巻きました
 「もう泣くのではありません、坊やは強いからね」

泣き止まぬ郁太郎を膝の上に、お濱自身も半ばは泣き聲です。龍之助も、さすがに心配さうに郁太郎の面をながめてゐたが、そのうちに痛みが少しは退いたのか、または聲を泣きつぶしてしまつたのか、郁太郎は母の乳房を抱えたなり少し静まつて來たので

「お医者様へ伴れて参りませう」

「もう遅いわ明朝の事にせい」

「可けません、手後れになると大變ですから、それに外の創と違つて鼠に噛まれたのは事によれば生命に拘はると申しますから」

お濱は此の眞夜中に郁太郎をつれて醫者へ往かうと主張する

「よし、そんならわしが一走り、醫者を迎へに行つて來る」

龍之助が醫者を迎へに行つたあとでお濱は

「悪い畜生だ」

鼠といふ奴の憎さが骨身に徹つて、取捉まえて噛み切つてやりたいお濱は鼠を呪ひつめて佛壇の方を睨めて齒噛みをする。

郁太郎の苦しむことさへ無くば、室の中も戸の外も、静まり切つた丑満時で、しん／＼と更けて行きます。天井では又しても鼠が走せ廻る、その足音が「ざまを見ろ」といふやうに聞える。

お濱は天井をまでも仇のやうに見上げて、見おろすと、痛々しい縋帯が泣き疲れた郁太郎の繊細い首筋を締めつけるものゝやうに見えて譯もなく可哀さうで可哀さうで堪りません

「坊や大切におし、咽喉は大事だからね」

お濱は斯う云つてホロ／＼しながら、じつと我子の面を見つめて

「お前が萬一の事があれば、このお母さんは生きて居られないよ」

實際、郁太郎は今までよく育つたもので、肉附はよし、癩疹も軽く
て済み、誰が見ても丈夫さうで、他人さへ可愛らしがつた位ですか
ら、お濱に取つてごうして、可愛がられずにゐられやう

「ほんとに思ひ出しても憎い畜生だ」

可愛さ餘つての憎さはまた鼠の方へ廻る

お濱は醫者を待つ用意で寝衣を平常着に着換えやうとして、漸く少
し静まつた郁太郎を、そつと蒲團の上に置かうとすると、郁太郎は
またひいと泣き出す。ハツとしてお濱はまた抱き直すと、さあ、そ
れから、また泣き出してもう聲も涸れきつてゐるのに、涙ばかりを
ホロ／＼とこぼし、バツチリと開いた眼に、ちつと母親の面を見据
えて五體をわな／＼させる。お濱はまた抱き直すと、さあ、そ
「坊や、まだ痛いかえ、まあお前、そんな怖い面をして母さんを見

るものじやありませんよ」

お濱は力も折れて泣きました。郁太郎は身をふるはせて、手に獅がみ
つくやうに、その眼は瞬もせず母の面のみ見つめてゐますから
「まあ、お前はなぜそんなにお母さんを苛めるの、何といふ因果だ
らうねえ」

お濱は泣きながら我が子の面を見てゐたが、眼をさぐると、今も
「あゝ罰だ、罰だ、これがほんとの天罰といふのに違ひない」

投げ出すやうに郁太郎を蒲團の上にさし置いたお濱の眼は物に狂う
やうに光つて居りました。お濱はまた抱き直すと、さあ、そ
お濱が今更天罰を叫ぶは遅かつた、併し遅かれ速かれ、一度は天罰
を悟つて見るのも順序であります。

我子なればこそ、これほどの些やかな創に氣も狂うほど心配するも

のを、今お濱が

「あゝ怖い」

と云つて慄え上がった瞬間に眼前にひらめいた先の夫文之丞の事は如何だらう、木刀の一撃に其の人が無惨の最期を遂げた時、お濱といふ女は其の人の爲に、どれだけ悲み、その人の相手をどれだけ怨んだか。

お濱とても今まで寢醒めのよい事ばかりは無かつたのですが、今といふ今、苦しがる郁太郎の面に文之丞の末期の色がある。天井で噪ぐ鼠の音、それが文之丞の聲、屏風の裏、其處から幽霊が出て来るやう、佛壇の中、其處には文之丞が蒼い面をして睨めてゐる。蒲團の唐草の模様を見ると其の蔓がぬる／＼と延びて来て自分の首に巻き着きさうにする。鏡臺の裏からは長い手が出てお濱の胸や腹を撫

で廻さうとしてゐる、針箱の抽斗からは、むら／＼と雲が出て来てお濱の目口に押込まうとする、障子の破れから今にも鬼が出て郁太郎を凌つて行きさうでならぬ。

室の内、何處を見ても此處を見ても皆んな怖ろしいものばかり、お濱は眼がクラ／＼して、ちつとしてゐられなくなつたので、立つて小窓を押し開けて外を見ました。

夜の空気がさや／＼と面に當るのでお濱はホツと息をついて、また郁太郎を抱き上げて、窓の處へ立ちながら

「ほんとに如何したのでせうお医者様は……」

郁太郎は泣きじやくつてピクリ／＼と身體を動かすばかり、矢張り眼は見開いて、母親の面を睨んでゐます。

丁度有明の月が此の窓からは影になりますけれども、月の光は江川

の本邸の内の土蔵の棟に浴びかゝつて、その反射で見た我が子の面
が此の世の人のやうには見えなかつたので

「坊や、皆んな母さんが悪かつたのだよ」

斯う云つて涙をハラ／＼と郁太郎の面に落しました。

醫者も龍之助もまだ来る容子はないのに、お濱はしかと郁太郎を抱
えたなり其の窓際に立ち盡してゐるのであります。

九

昨夜の騒ぎで机龍之助は少し寝過ごしてゐると

「良人、良人」

枕許を揺り動かすのはお濱の聲。

頭を上げて見ると、日はカン／＼として障子にうつる老梅の影

「こんなお手紙が」

「ナニ手紙が」

龍之助何心なく受取つて見ると意外にも逆封

「これは」

やゝ驚いて、表を読んで見ると「机龍之助殿」、裏を返せば「宇津

木兵馬」

龍之助は勃然として半身を起し、封を切つて讀むと

「貴殿に對して遺恨あり、武道の習にて果合致度、御得心あらば

明朝七つ時、赤羽橋辻まで御越あり度

「うむ小癩な果し状」

龍之助は手紙をボンと投げ出して、夜具を蹴つて起き直りました

「坊やは如何じや」

「よく寝て居りまする」

龍之助はお濱の抱いてゐる郁太郎の面をのぞき込み

「醫者の申すには、一時物に怖びえたので格別の事もないさうな」

起きて面を洗ひ食事を済ましてから

「お濱、坊やをこれへお貸し」

「それでもよく眠つて居りまするものを」

「眠つてゐてもよいわ、抱いて見たい」

「今日に限つてそんな事を」

「宜いからお貸し」

「折角寝たものを起すとまた怒かかりまする」

「宜いから此れへ出せといふに」

龍之助の言葉が強くなりますので、お濱は詮方なく、よく寝てゐた郁太郎を、そつと移して龍之助に渡すと、龍之助は抱き上げてつくつくと郁太郎の面から昨夜の創を繙帯したあたりなどを見て、今更のやうに

「まあ無事に育つがよい」

「無事に育たなくて如何するものか、ねえ坊や」

「親は無くても子は育つといふからな」

「両親共立派にあるものを、縁喜でもない」

お濱はやゝ不足顔。龍之助は思ひ出したやうに

「濱、わしも近々京都の方へ行かうと思ふ」

「京都の方へ」

お濱は意外な面

「京都へは諸國の浪人者が集まり亂暴を致す故、その警護の爲にと腕利きの連中が乗り込んで行く、わしも其れに頼まれて」

「まあそれは何時の事」

「近いうち、或は足もとから鳥の立つやうに」

「さうして坊やとわたしは」

「矢張り、こつちに留守して居れ」

「否、それは可くませぬ」

龍之助が不意に京都へ行くと言ひ出したので、お濱は驚いて力をこめて其れに故障を申入れる

「それでは、もう一度考へて見やう」

斯う云つて龍之助は、やつとお濱を安心させて自分は次の間へ引込んでしまひました。

太した創ではないが容體が思はしくないのでお濱が引つゞき郁太郎を介抱してゐる間に、龍之助は一室に閉ぢ籠つたまゝ咳一つしない

のであるから

「あの人は、さうしてあゝも氣が強いのかしら」

お濱は龍之助が我が子の大病をよそに、何をしてゐるだらうと怨めしさうに獨り言をして見たりしてゐるうちに、龍之助がついと室を

出て來ました。

見れば刀を提げてゐますから

「何處へお出でなさる」

「ちよつと芹澤まで」

「急の御用でなければ坊やも、こんな怪我なのですから宅に居て下

さい」

「急の御用でなければ坊やも、こんな怪我なのですから宅に居て下

さい」

「急の御用でなければ坊やも、こんな怪我なのですから宅に居て下

さい」

「急の御用でなければ坊やも、こんな怪我なのですから宅に居て下

「急の用事じや、直ぐ歸る」

「早く歸つて下さい、さうでないといふ心細いのですから」

「うむ」

出て行く龍之助の後影を見送りながら

「あの人は情愛といふものを知つてかしら」

何とは無しに龍之助と添うてからの事が胸に浮んで來ました。愚痴は昔に返るのみで、文之丞との平和な暮らしに自分が満足しなかつた事の報を今こゝに見るとは思ひ知つてもまだ、自分が悪い、自分だけが悪いのだとは諦め切れなないので。

こんな風にお濱は人を恨んだり自分を恨んだりして、郁太郎の介抱に一日を暮らしましたが、直ぐ歸ると云つた龍之助は、夕方になつても歸つて來ないのです

「ほんとうに如何した事でせう、あの人はあんまり情ない」

お濱は繰り返しく龍之助の歸りの遅いことを恨んで

「どうして現在自分の子にまで、こんなに情愛が無いのでせう」

一旦悪縁に引かされて、お互に切つても切れぬやうになつたればこそ、二人は兎も角も無事に此處まで暮したけれど、お濱にとつては

龍之助の情愛がいつも不足に堪へられなかつたのです。お濱は實際

龍之助から、もつと濃い情愛を澱がれたかつた筈なのに、それは存外冷やかで、時としてはお互の心と心との間に鐵を挿んだやうな隔

てが出て來るやうに感じ、遂には龍之助の愛し方が足りないばかり

でなく、二人の間に出來た子供に對してすら其の愛し方に不満足を

感ずるのであります

「郁太郎はおれの子ではない」

龍之助はいつぞや腹立まざれに、お濱に向つて此んな事を云つた事がある、それが今も怖ろしい勢でお濱の耳に反響して来るのでありました。

「あの人は、ほんとに此の子を、自分の子とは思ふてゐないのかしら」

そこへ漂然と龍之助が歸つて來ました

「今歸つた」

龍之助の面の色はいつもよりも一層蒼白く、お濱と郁太郎とを一見見たきりで、さつさと次の間へ行かうとする。お濱はこの時鴈の底まで龍之助の憎らしさが泌み込んで

「良人、この子は誰の子でござんせう」

その聲は泣き聲でありましたから、龍之助は其の切れの長い目でデ

ロリと

「誰が子とは」

「坊やは誰の子でせう」

「何を今更」

「郁太郎はお前様の子ではありませぬ」

「何を云ふのだ」

「此の子は死んでしまひますのに」

「何……」

龍之助はお濱が例の我儘な突かゝりが初まつたと思ふたが、今日はそんな嚇し文句に對して思ひの外冷淡で

「壽命なら死ぬも仕方がない」

「何の……」

お濱は凄^{すこ}い目^めをして龍^{りゅう}之助^{のすけ}を睨^{にら}みました。龍^{りゅう}之助^{のすけ}も亦^{また}沈^{しず}み切^きつた眼^め付^{つき}でお濱^{はま}を睨^{にら}み返^{かへ}す、いつもならば此^こ處^こで肝^{かん}癢^{しゃく}が破^は裂^{れつ}して、生^いきるの死^しぬのと猛^{たけ}り立^たつべき場^ば合^{あひ}であつたのに、今^け日^ふは不^ふ思^し議^ぎにも二^にの句^くを夾^{つま}いで何^{なん}とも云^いひ張^はりません。

龍^{りゅう}之助^{のすけ}は其^その儘^{まま}次^{つぎ}の室^{むろ}へ入^{はい}つて、机^{つくえ}に向^{むか}つて暫^{しば}らく茫^{ぼう}然^{ぜん}と座^まつてゐましたが、自^じ分^{ぶん}で燈^{あかり}火^ひをつけてそれから料^{れう}紙^し硯^{えん}箱^{ばう}を取^とり出^だして何^{なに}か書^かき出^だしたものと見^みえます。

問^まもなくお濱^{はま}は此^こ處^こへ入^{はい}つて來^きました。

「良^{あなた}人^{りゅう}、龍^{りゅう}之助^{のすけ}様^{さま}」

「何^{なん}だ」

「お願^{ねがひ}がござりまする」

「云^いつて見^みろ」

龍^{りゅう}之助^{のすけ}は書^かきかけた筆^{ふで}を置^おきもせず、お濱^{はま}の方^{かた}を見^み返^{かへ}りもせず冷^{ひや}やかな返^{へん}事^じです。お濱^{はま}の方^{かた}も何^{なに}か深^{ふか}い決^{けつ}心^{しん}があるらしくて、別^{べつ}にくどいことも云^いはず、これも眼^めの中^{うち}は矢^や張^は冷^{ひや}やかな光^{ひかり}で満^みちて

「離^り縁^{ねん}をして下^{くだ}さい」

龍^{りゅう}之助^{のすけ}はこの時^{とき}ちよつと筆^{ふで}を休^{やす}めてお濱^{はま}を見^み返^{かへ}り

「離^り縁^{ねん}、それも面^{おも}白^{しろ}からう」

「え、面^{おも}白^{しろ}うござんす、随^{ずい}分^{ぶん}あなただは永^{なが}く面^{おも}白^{しろ}い芝^{しば}居^ゐを見^みましたから」

「こゝらで幕^{まく}を下^{くだ}ろさうといふのかな」

「離^り縁^{ねん}状^{じやう}を書^かいて下^{くだ}さい」

「誰^{だれ}に断^{こと}つた縁^{ねん}でもない、今^{いま}更^{さら}三^{さん}行^{こう}半^{はん}にも及^{およ}ぶまいが」

「そんなら今から出て行きます」

「それも宜からう」

龍之助は、いよ／＼冷淡な氣色で

「併し此處を出て何處へ行く」

「何處へ行きませうとお差圖は受けませぬ」

「別に差圖をしやうとは云はぬ、たゞ郁太郎の面倒を頼みますぞ」

「郁太郎はわたしの子ですもを」

お濱はついと立つて出て行きます。

お濱は箆筒の抽斗を開けて、あれよこれよと探しはじめましたが其の中にふと抽斗の底から矢飛白の裕を引張り出しました。この裕は文之丞から離縁を申渡される時に着てゐた裕。そつと山へ

登り、釋の御板で龍之助に會つた時着てゐたのも此の裕。

されば無論の事、この裕を着て龍之助と一緒に、あれから御嶽の裏山傳ひ、氷川へ落ちるまでの炭焼小屋で夜を明かし、上野原の親戚を、そつと欺いて旅費を借りて、それで二人が甲州街道を江戸へ下つた時、やはり此の裕を着てゐたのであります。

こゝに所帯を持つてから、層屋にも賣られずに残つてゐることが思出の種。和田へ来る時甲州の姉が贈つて呉れた此の裕。自分はいゝ氣になつて随分姉様をも蔑ろに取仕切つた、それでも姉夫婦は自分が宇津木へ縁づくに就ては様々に力を入れて呉れ、この着物なども姉様が手縫にして下さつたもの。

お濱はそれを思ふと自分の我儘で有り過ぎた事、姉の親切であつた事などが身に沁みて來るのです。

「甲州へ歸りませう」

一旦は斯うも考へて見たのですが打ち消して

「あゝどうしてそんな事が出来やう、そんな事が出来る義理ではな

い、さあそんならば何處へ行かう」

お濱は龍之助に離れて行處はないのです。無い事はない、有るとい

へば、たつた一つあります。

その場所といふのは——つまり元の夫宇津木文之丞の居る處、其處

より外はない筈です。お濱は凝と考へ來つて血がすつと胸から頭ま

で湧き立ちました。

袷を投げ出した時……衣類の間に見えたのは袋に入れた一口の懐

劍です。

お濱は此の懐劍を見ると

「死！」

この世で最も怖ろしい感情

「生きて生恥を曝すより一層死なう」

これがこの瞬間に起つた考へでありました。

お濱は今まで死ぬ氣は無かつたのです、郁太郎をつれて兎に角此家

を出て廣い世間の何處かに隠れ家を見つけやうとの無鐵砲な考で胸

も頭も一ぱいでした。

生きる執着が残つてゐたればこそ色々と思ひ煩つたものを、それが

全く取れてしまへば、もう道は開けたので……その道は地獄より外

行き場のない道ではあるけれども。

お濱は手早く懐劍を拾ひ取つて盗み物を隠すやうに懐中へ入れて見

ると胸は山のくづれるやうな音をして轟きましたけれども、お濱の

面には一種の氣味のよいやうな笑ひがほのめいて、ちつと眼を行燈の光につけたまゝ失神の體で座つてゐる。

「濱、濱はまだ居るか」

これは龍之助が呼ぶ聲

「濱は居らぬか」

二度目に呼んだ時にお濱の耳に入りました。その時三度目の聲。

「濱、濱」

龍之助の呼聲が此の時お濱に取つて無茶苦茶に忌な感じを與へるのでありました。

お濱の返事がないので龍之助は立つて此方へ来るやうでしたが

「旅立のお仕度かな」

襖を向けると其處へ突立つて此方を見入つてゐます。お濱はデロリ

と其の面を見上げましたが、つんど横を向いて取り合ひません

「濱、お前は何處へ行くつもりだ」

「存じません」

「まあ宜いわ、先刻お前から離縁の申出があつて見れば赤の他人……」

……いやまだ餞別に申し残しがあつたのだ、よく聞いて置け」

龍之助は立つたなりで

「おれは近いうちに宇津木兵馬を殺すぞよ」

「兵馬を殺す！」

お濱の膝は向き直る

「うむ兵馬を斬るか兵馬に斬られるか……」

「それは——」

「まさか兵馬が小腕に斬られやうとも思はぬ、毒を食はゞ皿までと

いふことがある、宇津木兄弟を同じ及に……」
龍之助の蒼白い面に凄い微笑が送る。

お濱は真正面から其の面を見上げて、この時は怖ろしいとは些とも
思ひませんでした。

「お殺しなさい——」

十

龍之助は自分で酒を飲んで早く寝込んでしまひました。お濱の射入……
お濱は、また暫らくの間は、ぼんやりと座つてゐるばかり、郁太郎
は幸にすやくと眠つてゐます。

「兵馬を殺す」

と云つた龍之助の一言、それがお濱の胸を刺す。

龍之助も眠に就いたやうで、例の唸る聲、キリ／＼と齒を噛む音
お濱は思ひ出したやうに立上がつて次の間へ行つて見ました。

龍之助の机の上には、さき程書いてゐたらしい手紙が三本。お濱は
そつと其の一つを手にとつて見ると、それは宇津木兵馬からの果し
状でありました。

「武道の習にて果合致し度、明朝七つ時赤羽橋辻まで……」

お濱は讀み去つて宇津木兵馬と記された署名の處に来て、はじめ
萬事の合點が行つたのであります。……
殊勝な事、斯うも立派な果し状を人につけるやうになつたとは、自
分の知つたのは十三四の可愛ゆい兵馬、それがまあ……それにして

も、やつと十六か七、これまでには相當の修業も積んだ事ではあらうけれど、何といふても龍之助の腕は豪いもの、刀を合せれば龍之助の酷い太刀先に命を落すは知れた事、お濱は一圖に兵馬が可哀さうです

「うーん」

又しても魔される龍之助の聲、兵馬を斬つて血振ひをするのかとも想はれる

『兵馬どのが不憫じや』

お濱の手が又も懐劍へさわる、龍之助を殺す、罪の二人が共死をすれば可愛らしい兵馬が助かる——お濱の決心は急速力で根強く、遂に此處まで進んで來ました。

果し合を明朝に控えて兎も角も眠つてゐられるだけの餘裕が龍之助にはあるのです。

衰へたりと雖も劍を取つては人を眼中に置かね龍之助、僅かの間に一寢入りして氣力を養つて置かうと横にはなつたけれども、この頃の龍之助の氣は疲れてゐます。

夜なく魔されたり、齒を噛んだり盗汗を掻いたりすることは彼の新坂下の闇討に島田虎之助の働きを見てからであります。寢ても起きても島田の面つき、立つて行く姿、座つてゐる態度、それが龍之助の眼さきにちらついて離れることがありません。

それが爲に頭が少しづつ混亂して行くやうで、今も此の僅かなる一寢入りにさへ机龍之助の前には島田虎之助が衣紋の折目正しく一炷の香を焚いて端座してゐる處へ、自分は劍を抜いて後ろから覗ひ寄

る、刀を振かぶると前を向いてゐた島田が忽然と此方へ向く、横に廻つて突かけやうとすると、いつか島田は其方に向いてゐる、焦つて躍りかゝらうとすると島田の前に焚かれた香の煙が一直線に舞ひ上がつて其末端がクル／＼と廻つて自分の面に吹きかけて来る。龍之助、其の煙を拂ひながら太刀をつけて島田の周囲をグル／＼廻つてゐるうちに眼が眩んで鼻血が出て其處へ香の煙が濛々と捲いて来て息が詰まる。その時にヒヤリと自分の首筋に冷たいもの、

「やッ何者！誰だ！」

夢を破られた龍之助。バツと刎ね起きて無手と押えたのは和らかい人の手、其の手首には氷のやうな白刃が握られてありました。これは夢ではない、確かに現實

「やあ、濱ではないか」

龍之助の上から乗りかゝつて、彼の首に短刀を當てたのは現在の自分の妻の仕業でありました

「何を、気が狂うたか」

龍之助は短刀を奪ひ取つて、身を起すと共に、はつたと蹴倒すとお濱は向ふの行燈に仰向けに倒れかゝつて、行燈が倒れると火皿は破れてメラ／＼と紙に燃え移ります。

蹴倒されたお濱は、むつくりと起き直るや前に用意して明けて置いたと見える表の戸から外の闇へ轉げ出してしまひました。

「憎い女！」

お濱の倒した行燈の火は見る／＼障子に移ります。これを踏み消して置いて龍之助、刀を取つて同じく表の闇へ飛び下りる。

家の中も眞の闇。その中では郁太郎が咽喉の裂けるばかり泣いてゐる

る。

お濱は何處へ行つた。

闇とは云ひながら、もう夜明に間もない時ですから東の空は白み渡つてゐました。神明から濱松町へかけての通り、お濱の駆けて行く後影。

増上寺三門の松林の前まで追ひかけて

「待て！」

お濱の襟髪は龍之助の手に押へられて同時に其處に引き倒されたのであります

「放して下さい」

「濱、汝れは兵馬に裏切をしたな」

「早く殺して下さい——」

殺した處で功名にも手柄にもならぬ。のぼりつめた時にも冷靜になり得る龍之助。お濱の取り亂した姿を睨んでゐる

「龍之助様、わたしを殺して、どうぞお前も殺されて下さい」

面と面とを合せれば、いくらか白み渡つた空ですから、見て取ることも出来る通り、お濱はもう放せの助けるのと騒ぐ時は越して、言葉にも相當の條理がある

「わたしもお前様におとなしく殺されて上げますから、お前様もどうぞ素直に兵馬の手にかゝつて殺されて下さい、さうすれば、あれもこれも帳消……罪ほろぼしとやらになりませうから、ねえ、龍之助様」

御成門外で人の足音、増上寺の鐘。

「人殺し——」

龍之助は遂にお濱を殺してしまひました。

十一

「あの聲は——」

今の絶叫を聞き咎めたのは、御成門外で駕籠を捨てた宇津木兵馬の一行です。

「人殺しと聞えたが」

介添に來た片柳伴次郎が小首を傾ける

「慥かにあの松原の中」

兵馬は松原の木の下間を見込む

「見届けて來ますべえか」

提灯を持つた與八が松原の中へと進んで行く。松原の中へ入り込んだ與八、松の木にバツタリ

「あ痛え」

額を押えて見ると、紛と血の香

「はて

提灯を差しつけると、其處の松の木の根に人がある

「えッ人が——」

それは女、胸あのたりからベツトリと土にまで流れた血

「皆さん、女が殺されてゐる」

兵馬には大事の前、それでも人の一命と聞いて見過ごすわけには行かない

「あゝ、酷たらしい殺され方」

「それ血が袴の裾に」

「傷はごうじや」

「胸を一突き」

「もつと提灯を近く」

「あゝ可哀さうに、乳の下を突かれたのかね」

提灯を附きつけてオドくしてゐた與八は

「おや、何だか見たことのあるやうな女衆だ」

與八は死人の面に自分の面を摺りつけるやうにして

「若し……この女衆は……お濱さま……」

不安の色で兵馬を見上げて

「兵馬様……お前様もよく此の女衆の面を見て下さいまし、氣のせ

いか文之丞様の奥様に似てござる」

「何、姉上に」

兵馬は附添の片柳と水島とを押し別けて

「姿は變れど宜う似てござる、念の爲與八どの、この女の持ち物は

ないか、調べて呉りやれ」

「こゝに短い刀が……書付が、あれ此方にも」

與八が拾つて兵馬に手渡したのは、意外にも自分の手から机龍之助

に送つた果し状でありました。次に受取つた一通

「なに宇津木兵馬殿へ、はまより」

これはお濱の手づから書いたもので、そして兵馬に宛てた手紙。

机龍之助は果し合の場へ出て來ませんでした。

果し狀をつけられながら逃げるといふは此の上もなき恥辱。殊に人を殺せば血を見る筈の龍之助が此の場合に逃げ去るとは甚だ合點の行かぬ事です。

併しながら約定の時刻にも赤羽橋へ來るといふこともなく、新錢座の家へ行つて見れば、家の中は散々であるのに、子供が一人、聲を洒らして泣いてゐるばかり、手を別けて行方をさがしたけれどもわからず、これが爲に其の日の果し合は中止。宇津木兵馬は殘念の餘り張り詰めた勇氣も一時に碎くるの思でしたが、こゝに唯一の手がかりといふのは、机龍之助が芹澤鴨に宛てた書面一通を發見した事でその中に

兵馬を斬つて後、拙者は兼ての手筈の通り京都へ立ち退き申す

といふ文言です。

この手紙を見れば龍之助が今日の果合に立合う覺悟は勿論の事、立ち合へば必ず兵馬を斬ることに自分で定め、兵馬を斬れば京都へ飛ぶ其の手筈まで整うてゐたものと見えます。それほど覺悟が出来ながら逃げるとは何事であらう。これは誰にも、ちよつと譯り兼ねた處であるが、お濱を殺したものの、龍之助であらうとは——誰人にもそのやうに想像されるのであります。

十二

『どうも永らく御無沙汰を致しました』
妻戀坂のお絹の宅へやつて來たのは珍らしくも裏宿七兵衛。

「これは珍らしい七兵衛さん、如何したかと心配してゐました」

「つい百姓の方が忙がしいもんでございますから、それに骨休めを兼ねてお伊勢参りをして来たものでございますから、これはわざわざとお土産の印」

「それはお氣の毒な、お前さん方は、ほんとに羨ましい身分ですな稼いで置いてはお伊勢参りだの、江戸見物だのと氣晴らしが出来ますから」

「へえ、如何致しまして」

「並のお百姓では、そんなにチヨイ／＼出て歩かるものではありません」

お絹に斯う云はれて七兵衛は苦笑ひ

「些とばかり内職をやつてゐるものでございますから」

「内職を、何か反物でも商ひをなさるの」

「へえ、まあそんな事で」

「さう、そんなら今度ついでの方に、甲斐絹の上等を少し見せて貰へまいかね」

「宜しうございます、持つて参りませう、時にお師匠様」

七兵衛は話し向きを改めて

「お松の方はどうでございませう」

「あゝ、その事、その事、それはわたしの方からお前さんに尋ねたい、飛脚を立てやうかと思つてゐた處ですよ」

「へえ、お松が如何ぞ致しましたか」

「あの子はお前、駆落をしてしまひましたよ」

「駆落を」

「それも御主人の若様と逃げたとか、然るべき男と逃げたと云うんならお話にもなりますけれど」

「一體誰と逃げました」

「誰と云つてお前、山出しの馬鹿と逃げたんだもの、話にも何もなりやしない」

「馬鹿と……」

「お前さんには最初から話さないでわからないが、二月ほど前にお前の子を、わたしが四谷の神尾様といふお旗本のお邸へ御奉公に上げました處が、其のお邸に與太郎とか與八とかいふ馬鹿が居て、如何でせう、お松はその馬鹿に欺かれて夜逃げをしてみました」

「四谷の神尾様といふのは、あの傳馬町の神尾主膳様の事でございますか」

「さうです、その神尾様、三千石のお旗本なんだから、首尾よく御奉公して殿様のお氣に入れば、どんなに出世するかわからないのに人も有らうに風呂番をしてゐた與太郎といふ馬鹿と駆落するなしてわたしも呆れ返つてしまつた、あんな世話甲斐のない女といふは有りやしない」

「それほど馬鹿な女とは思ひませんでした、一體何方の方へ逃げましたか、手がりはございませんか」

「一向知れませんが、色々手配をして探がして見ましたけれども、どうしても譯りません、お前さんの方へも飛脚を立て、見やうとしましたけれども、殿様が仰有るには、そんな腐つた奴を騒ぎ立て、探すには及ばないと、それなりにしてありますが、わたしの身になると殿様には面目がないし、自分では腹が立つし……」

「さういふわけならば一つ私も探してみませう、あのお松とても性
 來が、それほど馬鹿では無かつた筈ですから、尋ね出して聞いて見
 たら何か事情があるかも知れません」

十三

七兵衛が最初この家へ入つた時から見え隠れについて来て、今まで
 路次内や表通りをうろくしてゐた一人の紙屑買が、今七兵衛が出
 かけると、また其のあとをついて行きます。

七兵衛は妻戀坂から本郷元町の山岡屋の前まで来る。山岡屋は戸が
 締まつて賣家の札が斜に貼られてある。暫らく立つて見てゐると、

「もし旦那」

後から呼びかけたのは紙屑買

「私ですかえ」

「へえ左様で」

「何ぞ御用かへ」

「へえ別に用といふわけでもございませませんが、旦那様は最前からこ
 の店の模様を御覧になつて居りまするが……」

紙屑買は手拭を疊んで冠つた額越しに七兵衛の面を仰ぎ

「山岡屋の事で何かお聞きになりたいならば、私がよく知つて居り
 ますから」

妙な差出口をする男であるが、別段懐中から十手が飛び出しさうに
 もないから、これには何か仔細があるだらうと七兵衛は

「それは幸、山岡屋さんは今何處へお引越しになりました」

「それには長いお話があります、旦那様どちらへお出でとございませうか、何なら歩きながらお話を致しませう」

「私は新宿の方へ行きますが」

「それなら私も四谷の方へ参りますから、御一緒にお伴をしながら山岡屋没落の一代記をお話し申すことに致しませう」

七兵衛は氣味の悪い紙屑買と思ひながらも、まあ何を云ひ出すか聞くだけ聞いてやらうと、道づれになつて歩き出すと

「今から四年ほど前の夏の盛りの事でございました、或晩の事、あの山岡屋へ泥棒が入りましたな」

「ふむ」

「丁度旦那は留守でございました、處がお内儀さんのお瀧といふの

が眉の毛を剃り落した若い男を引張り込んでふざけてゐる處へ、其の泥棒がお見舞申したのでございます」

「成程」

「その泥棒といふのが、たゞ物盗りばかりではない、意趣返しに來たものと見えて、内儀さんと若い男を随分こつびごい目に遭はせて歸りました」

「成程」

「とても委しくは申し上げられませんが、早い話がお内儀さんと若い男を素裸にしましてな」

「ふむ」

「それでお前さん、朝になつてからの騒ぎといふものは御覽じろ話にも繪にもなりませんわ」

「成程」

「それが忽ち評判になる、山岡屋のお内儀さんは強盗に裸にされたといふ噂がバツとひろがつたから、とても居堪られませんか」

「成程」

「其處へ御主人が歸つて來た」

「ふむ」

「さあ家は揉める、何しろお内儀さんといふのが家附きの娘ですから、出るの入るの、摺つた揉んだの揚句」

「離縁になつたのかな」

「處が騒ぎの眞最中、御亭主殿が急に患ひついてボクリと死んでしまひました」

「はあ——て」

「それからお内儀さんといふものが捨鉢の大亂痴氣で身上は忽ちに滅茶々々、家倉は人手に渡る」

「ふむ」

「その又買った人がどうしても伸立たない、何でもあの土藏からお化が出るといふ噂で、あれから三代目、斯うして今だに賣物に出てゐますやうなわけで」

「それはまあ何してもお氣の毒」

「そのお内儀さんといふのは今如何してゐますな」

「さあ、そいふが聞き物で……併し私ばかり斯うペラ〜喋つても宜いもんですか如何ですか、旦那、お前様は一體山岡屋の何なんでございます」

「お前さんはまた何だえ」

二人は面を見合せて

「實は旦那（紙屑買の言葉が妙に改まつて）私共の面にはお見ええがござんすまいが、私共の方には旦那のお面によく見覚えがござります」

「何だ私の面に見覚えとは」

「へ、何を隠しませう、と大きく出るほどの者ではございませんが實はあの頃山岡屋に丁稚奉公をして居りました」

「はあ山岡屋の番頭さんか、それはお見外れ申しました」

「丁度、旦那があのお松といふ子をつれて店前へお出でなすつた時お面をよく見覚えて置きました」

「成程」

「成程だけでは張合がございませぬ、私もあのドサクサ紛れに店の

金を少々持ち逃げ致しまして、些とばかり悪い事をやり、今では此んな姿に落ぶれました、旦那をお見かけ申したのは外じやあございませぬ……」

「何だい」

「元はと申せば皆んなお前様の蒔いた種といつても宜いのでございませぬから、ごうか幾らか恵んでやつて下さいませ」

「お前さんも相當の悪になつたね」

七兵衛はデロリと紙屑買の面を見ると、紙屑買は嫌や味な笑ひ方をして

「その代り旦那、お前様がつれてお出でなすつたあのお松といふ女の子、あの子の行方を私がすつかり喋つてしまひますよ」

「うむ、さうか、兎も角お前さんにこれを上げるから喋れるだけ喋

つて御覽」

七兵衛は懷中から取り出した財布をソツクリ紙屑買に手渡しする

「ごうも此りや恐入りやした、それでは旦那、これから私がその娘

さんの居る處へ御案内をしてしまひませう」

それで二人が神樂坂の處まで来ると紙屑買は足が痛い／＼といひ出

す、ごうやらおれを蒔く氣だなと悟つた七兵衛は、わざと油断をし

てゐると、ふいと路次を切れて姿を隠す、先廻りをした七兵衛

「おい大將」

横の方から御膳駕籠を突つく

「やあ——」

「何がやあ——だ」

「旦那は足が早い」

「お前さんも早い」

「御冗戯を」

「足の痛いのは癒つたかね」

「また痛み出して來ました」

「そんなら今のやうに駆け出してごらん」

「もう御免です」

「一體わしを何處へつれて行きなさる」

「山岡屋のお内儀さんの處へ」

「山岡屋のおかみさんは何處におゐるでなさる」

「新宿に」

「それじやあ方角が違はう」

「また出直しませう」

「今度は屑屋さん先へお出で」

二人はまた歩み出すと、西の空がポーツと赤くなりませす

「あれ、あんなに赤く」

「火事だ」

「新宿の方だね」

「でも風がないから太した事はありますまい」

云つてるうちに火の赤るみは漸く大くなる

「儘かに新宿の方角だ、早く行かう」

「足が痛うございます」

七兵衛は紙屑買の手を取つて引する、紙屑買は苦しがつて

「旦那、さう引張つちや可けません、お前様の足は早過ぎる」

「グズグズ云はずに早く歩きなさい」

「まあ待つて下さい、それじゃあ旦那、私は白状しちゃいます。お前様のお尋ねなさるお松さんといふ娘は女郎に賣られちまつたんですよ」

「ナニ、女郎に、何處へ」

「それがお前様……」

「早く云へ」

七兵衛は紙屑屋の手を捻ち上げると

「それが遠くで」

「何處だ」

「京都へ賣られて行つてます、痛い！」

紙屑買の自白する處によると、お瀧はあの晩與八を出し抜いてお松を欺き、急に此の男の家へつれて來たこの事、そこへ伴れて來ると

共にお松を人買の手に賣渡した事、その賣渡し先は京都の島原である事、わざと京都へ賣つたのは江戸では事の發覺を怖れるからのと、折よく京都の方から買手が來てゐたのに話が纏まつたものだといふ事です。

此の男の云ふ事がドノ位まで信用が置けるか知らないが、前後の話の辻褄はよく合うから七兵衛は

「さあお前の家まで行かう」

「旦那、もうどうか御免なすつて」

「お瀧といふ女はお前の家に居るんだらう」

「いゝえ、如何致しまして」

「お瀧とお前と共謀になつてお松を誘拐して賣つたに違ひない」

「ナニそんな事はございません」

「兎も角急げ」

丁度この時町の角に自身番があつたのを紙屑屋が見かけて、突然に大きな聲

「泥棒！」

「ナニ！」

七兵衛が首筋を締め上げると紙屑買は苦しい聲を張り上げて

「旦那方、こいつは泥棒でござります、泥棒々々」

自身番に詰めてゐたもの、今の火事騒ぎで通りかゝつたもの、こちらへ飛んで來るから七兵衛は紙屑買を突き放して人混みの中へ姿を隠してしまひます。

お松が果して京都へ賣られたものならば、七兵衛の足は直ぐに京都

へ飛ぶであらう、七兵衛がその氣で歩き出した時は、朝江戸を出て其夜は京都の土を踏むことであらう。

それとは關係なく、机龍之助が落ち行く先も亦京都であるとすれば宇津木兵馬の追つて行く處も亦京都でなければならぬ。殊に芹澤、近藤、土方等、新徴組が數を盡して向ふ處は京都警護の役目であれば、江戸の事件があらへ移る。

十四

青梅街道をトポくと歩いて行くのは與八です。

脊には郁太郎をおぶつて、手には風呂敷包を紐で絡げて提げ、足は草鞋を穿いて、歩きながら時々涙をこぼしてゐます。

與八の身になつても意外な事ばかりで、お松をつれて此の街道を歸るつもりであつたのが、一夜のうちに此んな事に變つてしまつたのです。

「お、與八じやねえか」

「あゝ太郎作さん」

畑の中で仕事をしてゐる知合の百姓

「江戸から歸つたのかい」

「うん」

「儲かつたかい」

「儲からねえ」

「そりや何處の子だい、お前の子じやあるめえ」

「俺の子じやあ無えよ」

「拾ひつ子かい」

「拾ひつ子だよ」

「あゝお土産を持つてるな與八さん、そのお土産を此處へ分けて行
けよ」

與八は情けない面をして包に眼を落しながら

「こりやお土産じや無えよ」

此の包にはお濱の遺髪が入つてゐるのです

「太郎作さん、俺が水車は大丈夫かえ」

「あゝ大丈夫だよ」

「水で突ん流されるやうな事は無かつたかい」

「うん、そんな事は無え」

「さよなら」

與八はスタク／＼と出かけます。

御嶽の山も澤井あたりの山も大菩薩の方も、眼の前に連なつてゐま
す、與八はこれを見ると又悲しくなつて、密と後の郁太郎を振り返る
と子供は無心に寝入つてゐる。ぼんやり立ち止まつては、提げてゐ
たお濱の黒髪を包んだ風呂敷に眼が入ると、ひとりでに涙がこぼれ
ます。與八は善い事をしては、いつでもそれが悪い結果になる、あ
れもこれも皆んな自分が馬鹿だから、これからは罪滅ぼしに多くの
人の追善をはかり、傍ら此の子を育て上げて立派な人にして申譯を
立てねばならぬ。

與八には人を怨むといふ考が無くて、一も自分が悪い、二も自分が
悪いで通つて行くのです

「俺の大先生に拾はれた處は此處だ」

與八は其の昔、自分が拾はれたといふ處へ来て一休み。

ちうはくの めくみもふかき こかはてら
ほとけのちかひ たのもしきかな

東海道、關。
江戸へ百六里二丁。
京へ十九里半。

十五

伊勢の國鈴鹿峠の坂の下から此方へ二里半、有名な關の地蔵が六丈無碍の錫杖を振りかざし給ふ處を西へ五町ほど、東海道の往還よりは少し引込んだ處の、參宮の抜道へは近い、粗末な茶店に、七十ばかりになるお爺さんが火繩をこしらへながら店番をしてゐると

「許せ」

上りの客は此の宿で、下りの客は坂の下あたりで宿を定めてしまつ

たと思はれる時分、この茶店へ漂然と舞ひ込んだのは一人の旅の武士であります。

「お出でないまし」

老爺は火繩の手を休めて腰を立てると、武士は肩にかけた派別の荷物を椽臺の上に投げ出して野袴を裾をハタ／＼と叩き

「老爺」

「はい」

「汲みたての清い水を一杯所望」

「はい／＼、汲みたての水、宜しうございます、家の井戸は自慢もの、上水でございまして」

老爺が水を汲みに裏へ廻る時、件の武士は椽臺に腰を下ろしてゐたが、頭に戴いた竹皮笠は取らず、細く胴金を入れた大の刀を取つて

傍に置き伏目になつた面を笠の下から覗くと、沈みきつて、机龍之助は、兎も角も、京都を目ざして此處まで落ちて来たものです。

老爺が手桶に汲んで来て呉れた水を、竹の柄杓で一口飲んで、餘水を敷居越に往還へ投げ捨て、柄杓を手桶に差し込んでホツと太息をつく

「お茶を如何でございますな」

老爺が念を押して見ると龍之助は首を左右に振る、火鉢をすゝめても煙草を吹かす容子もないし、詮方なく老爺は再び元の座に戻つて火繩にかゝらうとすると

「草鞋を一足呉れぬか」

「はい／＼」

吊された手づくりの草鞋一足を引き抜いて

『峠を三度上り下りしても大丈夫金の草鞋といふのでございます』
老人の癖は自慢である、水を飲ませるにも草鞋を賣るにも、すべて
自慢が付き纏ふ

『それはさうとお武家様、今から草鞋を穿き換えて何れへござらし
やる』

龍之助の穿き換うる足許を見ながら、老爺が不審を打つたのは、こ
の宿で泊るにしても、坂下まで行くにしても、まだ持ちさうな草鞋
を捨てるのは早い。

龍之助は其の不審に答へなかつたから、老爺は手持無汰沙で

『降らねばいゝに』
軒場から天を仰いで獨り言。

成程、今日は朝から陰氣臭い日和であつた、關の小萬の魂魄が今だ
に此の土にとゞまつて氣壓を左右するの知らん、「興作思へば照
る日も曇る」の歌が陰に響けば雨が降る

『今夜は此の宿でお泊りが分別でござりませうがな』

老爺は忠告とも獨り言ともつかないやうな事を云つて、また座り込
んで火細にかゝる。

草鞋を穿き終つた龍之助は、笠越に空を見上げてゐる處へ

『さあ御新造、こゝが抜道の茶屋で』

威勢よく店前へ着いた一挺の駕籠、垂を上げると一人の女

『お濱』

龍之助は僅に其の名を齒の外には洩さなかつたけれども、この女の
名が濱でなければ不思議である、それとも龍之助の眼にはすべての

女の面がお濱のそれに見えるのかも知れませんが

「駕籠屋さん、どうも御苦勞様」

龍之助は眼をつぶつて其の姿を見まいとした、耳を抑えて其の聲を聞かまいとした。あれもこれも生き寫し。

女は駕籠から出て

「駕籠屋さん、どうも御苦勞様」

といひながら帯の間を探つて見て、ハツと面の色を變へ、慌しく懷や袂に手を入れて

「まあどうしませう、ちよつと駕籠の中を」

隅々を調べて見て當惑の色はいよゝゝ濃く

「駕丁さん、濟みませんけれど」

二人の駕籠屋は突立つたなり左右から女の容子をながめてゐたが

「何だえ御新造」

「伴れの人が程なく此れへ見えますから、少しの間待つてゐて下さいな」

「待つてゐると仰有るのは」

「確かに持つてゐた筈の……紙入が見えませぬ故」

「何だ紙入が無えと」

女の面をザロ〜と見て、傍に敷き放してあつた産の上に尻を乗せたのは此の宿では滅多に見かけないが、桑名から參宮の道あたりへかけては可なりに知られた黒坂といふ悪でしたから、茶店の老爺は

氣を揉んでゐると

「そいつは大變だ、紛失物を其の儘にして置いたんじやあ、この黒坂の面が立たねえ、悪くすると雲助仲間の名折れになるのだ、なあ

相棒あひぼう

『うむ、さうだ』

『それじゃあ、もう一番駕籠に乗つてお貰え申して、お前様に頼まれた處から此處へ来るまでの道を、もう一ぺんようく見きわめた上、宿役へお届け申すとしやう、相棒、時の災難だ、もう一肩貸して呉んねえ』

『合點だ』

『あゝもし、それほどのもものでは有りませぬ、ホンの僅かばかりですから……どうも困りましたねえ』

『お前さんも「るだらうが、此方も商賣の疵になる、さあどうかお乗りなすつてお呉んなさい』
手を取つて無理にも駕籠へ押し込まうとするから、女は困じ果てゝ

『それでは駕丁さん、斯うませう……』

艶々しい頭髮の中から抜き取つたのが四寸ばかりの銀の平打の簪

これが窮した揚句の思案と見えて

『これを取つて置いて下さい』

『そんな物は要らねえ』

黒坂は平打の簪をグツと引たくつて

『さあもう一ぺん駕籠に乗り直してお呉んなさいまし』

『駕丁さん〜』

火繩の老爺は見兼ねて膝を叩いて立ち上がつて來ました

『まあ〜』

割つて出たけれども差當り仲裁の言葉に行き詰まつて

『いゝ加減にするがいゝやな』

「何がいゝ加減だい、爺さん」

「女乗にあんまり言ひがゝりを附けねえ事だ」

「爺さん、言がゝりといふのは何方の事だか知れたもんじや無え、引込んで居な」

「あれ、ごうしませう」

「よ、もう一べん乗り直してお呉んなさいまし」

女の腕を押えて、片手は帯の處へかけて押せば、よろゝと駕籠の椽へ押しつけられます

「あれ堪忍して下さい」

斯うなると机龍之助、たとへ血も涙も涸れきつた上の事とは云へ何とか言葉をかけねばならぬ場合に立ち至つたのです

「駕丁——駕丁」

黒坂が振り返つて見ると、今まで気がつかなかつた旅の武士が一人笠越しに凝と此方を見据えてゐます

「何ぞ御用ですか」

「駕籠賃は拙者が立て換えるによつて此れへ出る」

「へえ」の言葉を聞いて、黒坂はさう思つて龍之助連といふのは此の武士の事であらうかと、黒坂はさう思つて龍之助の傍までやつて来て

「ナニ、この御新造がおかしなことを云うもんですから」

敷居の上へ腰を卸ろして煙草入を引抜き太い煙管を取出して口に咥え、吠を横にしてハタいて見る

「幾らになる」

「へえ、龜山から一里半の丁場でござら」

「宜しい」
龍之助は財布を取り出して小銭百文をバラリと椽臺の産の上へ投げ出して、其の取るに任せると、黒坂は横目で

「有難うございます」

其の小銭はまだ手にだも觸れないで、女の方を流し目に見て

「御新造、酒手の方をいくらか……旦那に話して見て戴きてえもんでございます」

女も亦この時龍之助のあることを初めて知つて、如何にも氣の毒さうに

「そんな無理な事を云ふものではありませんね」

「無理とは何方の云ふことだ御新造、一體お前様は龜山の何處からお出でなされた、お前様の駕籠に乗り方があんまりあはたどしいか

ら随分酒手を買う筋があると睨んだのに何が無理でえん」

「まあ如何しませう」

女はわしつと泣き出すと、龍之助はすつくと立つて物も云はずに黒

坂の横面をビシッリ

「あ痛ッ」

黒坂は何としたか一度引くり返つて、其の次に居直るかと思へばさうでもなく雲を霞と逃げて行きます。

黒坂の逃げたのは龍之助を巡廻の役人でも思つたのか、それとも敵はじと見て仲間を呼んで仕返しに来るつもりでもあらうか

「何ともお禮の申上げやうがござりませぬ」

女は亂れた衣紋を繕うて、龍之助の前に心からの感謝を捧げる

「お怪我はござらぬか」

「いゝえ別段に怪我は致しませぬぞ……あなた様がお出で下さらねば、どのやうに成りますることやら」

「悪い駕丁共である」

龍之助は再び椽臺に腰を下ろす、禮を云ふ女の面、潤澤な髪を島田に結うた具合、眼つきに人を引きつける處、首筋から脊へかけてすつきりした……どう見てもお濱です

「お、お豊さん、これに見えてか、えらう、わたしは遅れましたわいな」

斯う云ひながら此の場へ駆け込むやうにしたのは、旅の姿はしてゐるがやつ／＼しい優男

「真さん、わたしは苛い目に遭ひましたわいな」

女は男の姿を見かけるとオロ／＼と泣きかけのたので

「お前は泣いてゐる、まあどうしたもののじやいな」

男は近寄つた女の脊を撫で髪の手までも掻き上げてやり、他の見る眼も親切にいたはります

「悪い駕籠屋に難題をかけられて危ない目に遭うところを、是にお出でのお武家様に助けて戴きました」

「お、悪い駕籠屋に、わしも其れを心配してゐた……これはまあいづれのお方様やら、御心切に」

若い男は龍之助の方に向き直り、匆卒の場合ながら折り屈みも至つて丁寧であります。

この若い男の語る處によれば、男は京都の者で女は龜山、二人は親戚の間柄で、一緒に伊勢參宮をすることで、この宿で待合はせる約束であつたその事。

龍之助は二人が交々申述べるお禮の言葉を聞き流して

「各々方は早く此處をお引取りなさい、また悪者が立ち返ると事が面倒じや」

「左様ならば」

男は女を促して、龍之助には改めて慰慰にお辭儀をして、手を取り合はぬばかりに欣々として立ち行く、二人の後影を机龍之助はしばらく見送るともなく見送つて居りました

「お、要らざる事に暇取つた、老爺茶代を置く」

十六

坂の下へ着いた時分には、坂も曇れば鈴鹿も曇る、果してポツリ／＼

と涙雨です。

この雨が峠へかゝれば雪になる。雨になり雪にならずとも夜になるには定まつてゐる。鬼の棲むてふ鈴鹿の山を殊更に夜になつて越えなくとも、坂の下には大竹小竹と云つて、間口十八間奥行これに叶ふ名代の旅籠屋もあるのだから、龍之助一人を泊めて狭しとするでも無からうに、他目もふらずどう／＼坂の下の宿を通り越してしまひました。

これから峠へかゝつて三里、茶屋も宿屋もないものと思はねばならぬ。さては夜道をするつもりで草鞋を穿き替えたものと見える

「雨か」

龍之助が立ち留まつて天を仰いだ時は、鈴鹿の山も關の雄山も一體に夜と雨とに包まれて、行手に鬱蒼と一叢の杉の木立、巨人の姿に

盛り上つて、其の中からチラ／＼と燈明の光が洩れて来る。身はいつか鈴鹿明神の鳥居の前を遠からの處に立つてゐたのであります

「あゝ雨か」

この雨は龍之助が坂の下の宿に入る時分から降り出した雨です。今見れば笠も合羽もどツシヨリ、それを氣着かず、こゝまで来て「雨か」は甚だ遅い

「あの客人は何處へ行かんすやら」

大竹小竹の宿引が不審の眼を睜つたのも氣がつかず一文字に此處まで来て

「雨では山越も困る」

鈴鹿明神の森の中を見込むと、鳥居の右へ向つては峠の山道、鈴鹿御前の社と内外宮とが棟を並べた中に、春日形の大燈籠の光も雨に

濡れてゐる、左手にはそゝり立つ大杉一幹、その下に愛宕の社、續いて宮司の構、龍之助はその何れへも行かず、正面から鳥居を潜つて杉の大木の下石段を踏む。引返したとていくらの道でもあるまいものを、尋常の旅籠について軟かい夜具を被つて隠やかに夢を結んだら宜かりさうなものを。

身に火のついたものは井戸の中へも飛び込む。龍之助は心頭に燃えさかる火を消さんが爲に、わざと淋しい處怖ろしい處を求めて行くのか知らむ。闇をたどつて忍びやかに鈴鹿明神の頓宮に入り込んだ龍之助は、取り敢えず荷物を抛り出して、革袋の中から火打道具と蠟燭と懐中付木とを探つて火をつけて床に立てゝ。濡れた笠と合羽を脱ぎ捨てゝ、また革袋から小提灯を取り出し、床に立てた蠟燭をそれにうつして一通り社段の中を見廻しました。

荷物を枕にして見たが眠れない。

お濱によう似た女の事が、どうも眼先にちらついてならぬ。若い夫婦が二見ヶ浦のあたりを行く、それがお濱と自分のやうだ、お、郁太郎も居るわい。

兎にも角にも、お濱は情のある女であつた。不足を唱へたのはあゝいふ勝氣な女の常で、その癖よくあの暮しに辛抱して世話女房をつとめ了せたものだ……情に強いやうで實は極めて脆い女である、自分を誤つたのがあの女の罪か、あの女を誤らせたのが自分の罪か、今となつて物の哀に動かされると、龍之助も人が戀しくなる、眼が冴えて眠れない。

外では雨に交る風の音、稻荷の瀧の音が遠く攻鼓のやうに響いて来る、と、その中に人の躰

『はて、人の躰がするやうじや』

龍之助は小提灯の光を揚げて見ると、四隅のいづれにも躰の主は見えないで、見上げる處に大きな額、流るゝ如き筆勢で

鈴鹿山、浮世をよそに振りすてゝ

いかになり行く我身なるらん

これはこれ西行法師の歌でありました。

十七

『お前にさう云はれると、わしはどのやうにして立いやら』
床の柱に凭れて若い男は思案に暮れてゐる容子を、それと向き合つて女は和めるやうに

「どうと云うて眞さん、今宵は此處へ泊つて明日はおとなしうお歸りなさるが、お前の爲、わたしの爲でござんせう」

「それがなる位なら……わたしは斯うして此處まで來はせぬういな」

「そんならばどうしやうと云ふの」

「それはお前の心を聞いての上」

「わたしの心は今云ふた通り」

「では、わしに京都へ歸れと云ふの」

「それがお互の上分別」

「やと云うて、わしはもう京都へは歸られぬ」

「そんな駄々を云ふものではありませぬ」

「いや、お前は何も知らぬ、わしが今日の身の上を知らぬ」

「今日の身の上といふて、お前はやはり龜岡屋の跡を取る安樂……」

分ではないか」

「それが違ひます、今の龜岡屋はお前の思うて居るやうな龜岡屋ではありやせぬ、わしの家は先月の十六日の夜に盜賊が入つて」

「あの盜賊が」

「軍用金じやといふて家の金銀は申すに及ばず、公儀よりお預かりの大切な品までも皆んな奪つて行きました」

「それは、ついぞ初めて聞きました」

「それに、わしが前からの身持、多分の使ひ込みが一時に現はれてほんにもう立つ瀬がない」

「そんな事とは少しも知りませんでした」

「龜岡屋は丸つぶれ……父母へ何ともお氣の毒、それに不憫なは妹の事」

「お雪さんが」

「あ、島原へ身を賣つてしまふたわい」

男はホロ／＼と涙をこぼします

「まあ、お雪さんが島原へ」

女は驚いて

「も一度委しく話して下さい、お雪さまはもう勤めにお出なされたか、島原は何といふ家で、それはお母様も御承知の事か」

「この上尋ねて貰うまい……兎も角それで、わしが京へ歸れぬわけを察してたも」

男は腕を深く組んで、しやくり上げあるやうです。龍之助とは火繩の茶屋で別れて、この若い男女は參宮に行くでもないし、地藏堂に近い宿屋の離れ座敷に、斯うして打明け話をし合つ

て泣いてゐる。峠で龍之助を苦しめた雨は、この中庭の植込をも物柔かに濡らしてゐる。關の小萬の涙雨はごちらへ降つても人に物を思はせると見えます。

「どうしませうねえ」

今まで和め氣味であつた女の方が事情を聞いてから一層力を落したやうです

「せめて妹の身を救うてやりたいが」

しばらく経つて男の聲。外では雨がじめ／＼降つて夕べを告げ渡る寶藏寺の鐘の音に、たつた今女中の點して行つた燈の影がゆらくと揺れる、女はふと思ひ出したやうに庭の木立に濺ぐ雨を見て

「日が暮れました今晚は歸らねば」

素振は急に落着かなくなる

「歸る」

男は屹と首をもたげて

「わしを一人置いてお前は歸るのか」

「悪く取つてはいけません、わたしはもう前のやうな身では……」

「はあ、それでは兼ねて噂のあつたやうにあのお前の縁組が……」

「そんな事はないが今宵はどうぞ歸して下さい、そしてわたしにも

考へることがあります故、明日の朝は、きつと出直して参りますか

ら」

「もう日も暮れたに、一里半の道を、また最前のやうな悪者が出た

ら」

「と云うて歸らねばわたしの身が立たず、鯨籠は宿に頼んで性の知

れた者を雇うて行きますから」

「それでは強つて泊めても悪い、歸るならお歸り」

「どうぞさうして下さい、その代り明朝は」

男は返事をしない、女は濟まないやうな氣分で立ち上りました。

女の龜山へ歸るといふのを、男は涙を隠して廊下まで見送り、引返

して、がつたりと倒れるやうに

「あゝ豊さんまでが……」

と云つて、またハラ／＼

龜山へ歸るといふて出たお豊は、しばらくすると何故か戻つて來ました。廊下を忍び足に、もとの室の處まで來ると障子の外に立つて中の動靜に氣を配るやうでした

「これまあ、眞さん、お前は——」

障子を押し開けて、飛びついた男の手には白刃がある、男は脇差を抜いて咽喉へ突き立てる處でした

「此んな事もあらうかと、胸が騒いでならぬ故、立ち戻つて来ましてわいな、さあ放して」

「豊さん……どうでもわしは死なねば」

「そんな氣の弱いことがありますが、遺書まで書いて、危ない事、危ない事」

女は男の手から脇差をもぎ取つて、

「今、お前が死んだら親御たちや妹さんは如何します、わたしも此れでは歸れない、歸ることは止めにします、眞さん、泊つて行きます、此宵は泊めてもらひませう、ゆつくり打ち開けて相談をしませ

う、ね」

お豊は眞三郎と一夜を語り明かし、どう相談が纏まつたものか、その翌朝は二挺の駕籠を並べて、龜山へは歸らずに、丁度龍之助が草津へ着いた頃、男女は鈴鹿峠の頂を越えたのでありました。

お豊の實家で娘の姿が見えぬとて、親達もお豊の婿になるべき人も血眼になつて、八方へ飛ばした人が關と坂下へ来た時分には、男女の姿は土山にも石部にも見えませんでした。

大菩薩峠

鈴鹿山の巻、了

大菩薩峠

(壬生と鈴鹿の巻)

中里介山著

昨日も、今日も、龍之助は大津の宿屋を動かさない。京都までは僅か三里、ゆつくりと此處で、疲れを休まして行くつもりか。

今日も、日が暮れた、床の間を枕にして龍之助は、横になつて、其處に投げ出してあつた小さな本を取り上げて見るとはなしに見て行、うちに隣り座敷へ客が来たやうです

「どうぞ、これへ」

中の案内だけが聞えて、客の聲は聞えないが、疊ざはりから考へ

ると一人ではないやうです

「お風呂が明いて居りまする」

「あゝ、左様か、それではお前先にお入り」

「わたしはあとで宜うござんす」

「御一緒にお入りなされませ」

客は若い男女の聲、それが聞いたことのあるやうなので、龍之助は

本を伏せて氣を取られる。

隣りへ来た客といふのは、火繩の茶店で龍之助と別れた男女、龍之助

は再び耳を傾くるまでもなく、それと悟つて、さうして奇妙な心持

がしました

「參宮の歸りにしては餘り早い」

宵は、あまり客も混雑せず、大寺にでも宿つたやうな氣持、靜か

中里 伏山 著

にして居ると、襖を洩れて、聞ゆる男女の小聲が、龍之助の耳に入ります。

「明日は京都へ着きますなあ」

「京都へ着いたとて……」

男は歎息の聲

「わたしは、早うお雪さんに會ひたい」

これは、お濱に似た女の聲

「妹に會うたからとて如何なるものではない……あゝ、わたしは」

層此處で死にたい」

「ほんとに、死んでしまつた方が……」

こゝで、また話しが途切れます。

龍之助思ふ様、やつぱり、これは無分別な若い者共じや、

「わたしじやとて、もう龜山へは歸れず」

「わしも京都へは歸れず」

「死んでしまはふ、死んでしまはふ」

この聲は少し甲を帯びて高かつた、龍之助が此方にあることを知らないものだから。

男は死んでしまはふと云ふ、女がそれに異議を唱へないのは、それを黙認して居る證據で、此の男女の相談は心中といふ處へ落ち行くのが歴々とわかります。

「それでは、お前」

「眞さん、わたしは、もう覺悟を定めました」

「済まぬ、済まぬ、お前には済みませぬ」

「いへえ」

「この世の納めの盃」

また、こゝで話が途切れて、暫くは、變り世の聲、

「さあ、お前、書き遺すことはないか」

「はい、實家へ宛て、一筆」

「落着いて、見苦からぬやうにな」

「はい」

矢立をパチンと開けて、紙をスラ／＼と展げる、その音まで鮮やかに響いて來るのです、龍之助は、男女の舉動を手にとるやうに洩れ聞いてどう云ふものか、これを哀れむ氣が起らなかつた。

過ぐる時、少しばかりの危難に立ち合つてやつたのにさへ、自分に對しては再生の恩のやうに禮を述べた女が、こゝでは、この男の爲に喜んで死なうといふ、それほどに粗末な命であつたのか。